高崎経済大学ブックレット⑦

高崎からのグローカル人材育成

── 高大コラボゼミの12年 ──

矢野　修一

高崎経済大学地域科学研究所

目　次

はじめに …… 1
第一章　コラボゼミという連携形式 …… 2
　第一節　コラボゼミと高大連携 …… 2
　第二節　コラボゼミの相乗効果 …… 6
第二章　コラボゼミの具体的内容 …… 8
　第一節　日本企業のケーススタディ――「世界は誰かの仕事でできている。」 …… 8
　第二節　コラボゼミの一二年 …… 13
第三章　コラボゼミの意義と卒業生の声 …… 24
　第一節　コラボゼミ開始後の展開 …… 24
　第二節　コラボゼミ卒業生へのアンケート …… 29
おわりに――コロナ危機を越え、さらなる発展に向けて …… 40
巻末資料
　1　矢野ゼミ卒業生「高大コラボゼミ」アンケート質問項目 …… 49
　2　高経附三年一組卒業生「高大コラボゼミ」アンケート質問項目 …… 52

はじめに

このブックレットは、群馬県にある公立大学法人「高崎経済大学」と高崎市立「高崎経済大学附属高等学校」（以下、それぞれ高経大、高経附と略記）の間で実施されてきた「高大コラボゼミ」の内容を紹介するものです。

「高大コラボゼミ」（以下、コラボゼミと略記）とは、高経大・高経附の教員・学生・生徒が協力しながら、ゼミナール形式の少人数グループ学習を進める「高大連携」プログラムです。

詳しくは、これから述べていきますが、「日本企業のケーススタディ」を通じて「経済・経営の知識」「英語力」「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション能力」「リーダーシップ能力」などを高めるとともに、「進路・キャリア意識」の涵養を図ることを目指してきました。霞ヶ関的な用語であえてまとめるなら、「アクティブ・ラーニング」を通じた「キャリア教育」であり、「社会人基礎力」にも関連するプログラムです。

コラボゼミは、二〇一〇年度、世界経済論専攻の高経大経済学部・矢野ゼミ三年生と高経附三年一組（文系クラス）との間で始まり、二〇二一年度をもって一二年目となりました。時の経つのは早いものです。干支が一巡しました。この間、高経附は、二〇一四年度から二〇一八年度まで文部科学省ＳＧＨ（スーパーグローバルハイスクール）に選定され、今は高崎市独自のＴＳＵＢＡＳＡプロジェクト（後述）のもと、特色ある教育を行っています。

コラボゼミは、ＳＧＨ／ＴＳＵＢＡＳＡ両プロジェクトでも中核的コンテンツに位置づけられてきました。一二年間の参加者は、高経附三年一組の生徒が四三九人（男子一八三人・女子二五六人）、高経大矢野ゼミ生が一六六人（男子一一二人・女子五四人）に上り、今では国内外、社会の第一線で活躍しているコラボゼミ修了生が数多くいます。

高崎市を設立団体とする唯一の公立大学法人、高崎市が設置する唯一の高校という意味で協力関係を築きやすいこと、両校とも学生・生徒が一定以上の学力・意欲・生活習慣を身につけていること、地理的にも自転車で移動可能な距離にあることなど、両校の間で連携しやすい条件がある程度整っているのは確かです。

ただ、コラボゼミの内容は、より普遍的な適用可能性を持つプログラムだと考えています。少々大げさな表現をすれば、人文・社会科学系の地方大学が地域の人材育成・教育に貢献するモデル、様々な主体の連携によって地方都市から「グローバル＋ローカル＝グローカル」人材を育てるモデルになりえます。

コラボゼミは、日本の大学において長きにわたり育まれてきた「ゼミ」という学びの形式が有する可能性を高大連携においても開花させようという試みです。近年、類似のプログラムがいろいろな大学・高校間で行われていますが、企業の

協力も得ながらケーススタディ、インタビューを実施するユニークなプログラムは、その先駆けと言ってもいいでしょう。

コラボゼミについては、これまでにも研究書等で論じたことはありますが（矢野 二〇一一／二〇一三a／二〇一三b）、本ブックレットにおいては、高校・大学の教育関係者から注目されてきたコラボゼミの内容を広く一般市民にも紹介しようと思います。

今回、ブックレット執筆にあたり、コラボゼミ卒業生へのアンケートを実施しました。紙幅の都合上、端折るところもありますが、上州・高崎の地で積み上げられてきた「グローカル人材育成」について、卒業生の声を含め、皆さんに少しでも知っていただけたら幸いです。

なお、以下の内容は、「公立大学法人高崎経済大学」による公式の総括ではなく、あくまでも執筆者の個人的見解であることを、あらかじめお断りしておきます。

第一章　コラボゼミという連携形式

第一節　コラボゼミと高大連携

高経大と高経附

コラボゼミの内容に立ち入る前、少しだけ予備的な説明をさせてください。

まずは、両校についてです。

高経大は、高崎市が市立短大を母体として一九五七（昭和三二）年に開設した公立大学です。経済学部経済学科の一学部一学科の四年制大学として誕生しました。その後、学科・学部増、大学院開設も実現し、今では、経済学部（経済学科・経営学科・国際学科）、地域政策学部（地域政策学科・地域づくり学科・観光政策学科）、大学院地域政策研究科／経済・経営研究科（博士前期課程・後期課程）の二学部二研究科体制となりました。二〇一一（平成二三）年に公立大学法人に移行し、現在に至っています。

高経附は、一九二四（大正一三）年に設立された高崎実践女学校にまで遡る歴史を持っ

高崎経済大学

た高崎市立女子高校を母体とし、一九九四（平成六）年に開校した男女共学校です。「男女共学化」「高経大附属化」「普通科の五コース（人文・社会・自然・芸術・体育）化」を柱に、歴史ある女子高校のさらなる発展を企図して開設されました（この間の事情、制度上の論点などについては、上岡 二〇〇三、矢野 二〇一三aを参照してください）。

両校は高崎市を設立団体・設置者とする唯一の大学・高校です。地方独立行政法人としての高経大は、制度上、附属機関を設置できないので「附属」というのは慣習的名称ですが、法人化後も、高崎経済大学長と高崎市教育長との協定に基づき、教育連携が図られてきました。自転車で一五分ほどの距離であり、地理的にも連携の条件は整っていました。

ただ、両校の連携が本格化したのには、時代の流れ、特に文部科学行政、後期中等教育・高等教育への社会的要請の変化が大きく影響しています。

高大連携に向けた動き

次代を担う人材の育成は、いつの世でも、どの教育機関にも求められる重要な役割です。現代は、グローバル化、デジタル化、少子高齢化など、数多くの複雑な課題に直面しています。大学教育・高校教育に関しても、これまでどおりの組織・理念・制度・方法では通用しなくなっています。時代の流れに対応するため、政策的に追求されてきた方向性のひとつが高大連携です。

詳細は省きますが、現在のような高大連携の流れに直接つながるのは、一九九八年、大学審議会が出した「二一世紀の大学像と今後の改革方策について」という答申です。答申では、各大学が高校生に対し、大学レベルの教育に触れる機会を広く提供することが望ましいとされ、大学側の対応を促しました。

また、同じく一九九八年、学校教育法施行規則第六三条の四などで、高校において大学等における学修を単位認定できるようになりました。その後、一九九九年一二月、中教審が「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」という答申を出し、日本における高大連携が加速しました。

一九九八年の学習指導要領改訂に伴い、高校のカリキュラムに「総合的な学習の時間」が導入されたことも付け加えておきましょう。近年では、この延長線上に「総合的な探究の時間」が設定され、「探究学習・課題解決型学習」がその趣旨に合致した学習方法だとされています（詳しくは、田口 二〇一八／二〇一九／二〇二一を参照してください）。

高崎経済大学附属高等学校

ただ、高校現有の人的資源・物的資源だけに頼っていては、必ずしもこうした学習方法を実践できません。文科省は「地域等の外部の資源」を活用しながら、必要な指導方法・指導体制を整えるよう求めていますが、高大連携は、こうした意味でも目指されるべきもののひとつとなったのです。

こうして、半世紀前なら考えられなかったような高大連携が模索されることになりました。では、なぜ大学生と高校生が「ゼミ」を「コラボレート」しながら行うのでしょうか。

なぜ「ゼミ」なのか

ご存じの通り、「ゼミナール」とは、問題関心の近い学生が集い、教員の指導を仰ぎながら少人数で、ディスカッションなどを進める形式で行われる学習スタイルです。近代日本の大学教育においては、主に法学部、経済学部で取り入れられ、重要な機能を果たしてきました（金子 二〇〇七）。

単に「重要」というばかりではありません。東京大学駒場キャンパスで今や「伝説」となっているゼミを展開してきた船曳建夫氏の言葉を借りれば、「ゼミ」こそは、もっとも大学らしい「知の形式」です（船曳 二〇〇五）。

「個々人の知の成果をたがいの目の前にさらし、たがいに論評し、一人では出来なかった発見をする。そこに論理として生起すること自体が楽しみ、エンターテインメントになる。これはまさに人間にとって生きることが楽しみになる最良の方法である。」

（ゼミという）「場を成立させること、それが大学で行われているもっとも困難でもっともやりがいのある、大学の建物も制度も規則も蒸発してなくなっても、それだけがあれば大学である、と言えるような作業」（である）。

ゼミの風景

ゼミの現実をここまでのレベルに導くのは簡単ではありません。こう言い切れるのは船曳氏ならではですが、大学におけるゼミの「理念型」はここで指摘されているとおりだと思います。ゼミという学びの形式は、大学でも教育改革が叫ばれるなか、あらためて注目されるようになりました。

大学教育が制度化・大規模化していく過程で「対面的な教育や互いに学び合う」という側面が薄れてきたのは確かです。だからこそ、ゼミ活動を豊かなものにすることによって、船曳氏が言うように、大学を「仲間・塾・学校の三段階を同時に持ち、自由闊達な議論と、底堅い基礎教養の習得と、優れた設備による専門教育の備わった制度」とすることが期待されているわけです。ゼミは学びの可能性を広げてくれるのです。

なぜ「コラボ」なのか

そのゼミをなぜ高校生と大学生がコラボで行うのか。

高校側が高大連携を求める要因のひとつに「大学での学びに触れる」「学び方を学ぶ」ということがあります。そうだとしたら、ゼミが最良の機会になるかもしれません。

将来やりたいことが分からないし、見つからない。よって、どの学部に行くかも分からないし、大学に行く意味も自覚できない。だから、勉強のモチベーションも上がらない。選り好みしなければ大学に入れる「全入時代」であり、一部の生徒を除き、入学試験も勉強へのインセンティブにはならない。日本の後期中等教育が抱える問題のひとつはここにあります。

一時期、「大学中退者三割」というニュースが教育関係者を驚かせました。経済的理由を含め、諸事情があるのでしょう。それにしても、せっかく入った大学なのに三割も中退するなんて、と驚かされたわけです。

今や高校の進路指導では、偏差値で輪切りにして、ただ大学に合格させるのではなく、生徒自身に将来を描かせ、社会に対する関心を持たせる、職業について考えさせ、自分の適性を見つけさせることが重要になっています。

コラボゼミは、こうした課題への答えのひとつです。たとえ擬似的なものであれ、大学におけるゼミという学びの形式に参加することの意義は、今時の高校生にとって非常に大きい。不慣れな形式であれ、年齢も近い大学生の導きがあれば、様々なことが学べるのではないか。そう考えて、コラボゼミを進めてきました。

学内駅伝大会（榛名駅伝）のあとで

コラボゼミには相乗効果があり、大学生にとっても非常に大きな意味があります。一言で言ってしまえば、「教えることを通じて学ぶ」となりますが、詳しくは、このあと少しずつ述べていきます。

第二節　コラボゼミの相乗効果

期待された効果――高校生の場合

開始当初、コラボゼミに期待されたことには、いくつかあります。

まずは高校生に対してです。

後述のように、新型コロナ禍に見舞われている今、リモートやオンラインの可能性も広がっていますが、ゼミという以上、顔を合わせなければなりません。ひとつ屋根の下に集まらなくてはならないのです。

どこの屋根にするか。高経大と高経附のコラボゼミは、高校側の「総合学習」の時間を充て、場所は高経大の施設・会議室を利用しました。大学生が出向くのではなく、わざわざ高校生に来てもらうことにしたのです。

「全国型公立大学」の高経大では、群馬県外出身者が在学生全体の七割を超えます。四七都道府県から学生が集まり、図書館も教室も大食堂も情報センターもある場所に定期的に足を運び、高校とは異質の雰囲気を体感してもらうことも、高校生の意識を高めるのには重要です。若干のアウェー感覚が緊張感を適度に高め、高校生を学びへといざなう要素のひとつになると考えたのです。

学びの形式としては、当初、以下のようなことが期待されていました。

第一に、少人数のゼミ方式でグループ学習を行い、経済・社会の現実への関心を高めること、すなわち大学での学びの内容や方法を実体験することによって、日常的な学習意欲を高めるとともに、進路、さらにはキャリアへの意識を涵養することです。

第二に、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力の向上です。ゼミという以上、共通するテーマ・題材について、グループ内で実際に発言し、議論しなければならないし、レポートやプレゼンテーションの形で研究成果を出さなくてはなりません。議論に必要なデータ、適切な資料を探さなければならないし、議論の仕方、伝え方の工夫も必要になります。どれも、いつもの教室で教卓からの一方通行授業を受けているだけでは、自然には身につかない能力です。アクティブ・ラーニングの必要性が叫ばれる理由もここにあります。

これらは、普通の高校生にとって少々高めのハードルかもしれません。でも「無茶苦茶」ではなく「少々」高いだけです。アートコーポレーション社長の寺田千代乃氏は以前、『日本経済新聞』（二〇二〇年九月一九日付）に連載された「私の履歴書」で以下のように述べていました。

「目標は手を伸ばしてつかもうとするもので、最初からつかめる所まで下げたものを目標とは言わない。」

今の限界の「一二〇％」ほど、適度なハードルへのチャレンジが若者を成長させます。しかも「コラボ」ですから、一人だと少々きつい目標をみんなで乗り越えるのです。失敗してもかまわない。「成功」と「失敗」は「チャレンジ」という同じ親から生まれる「きょうだい」だ。挑まなければ負けることすらできない。いろいろな言葉を弄しながら背中を押してきました。

期待された効果――大学生の場合

高校生と同じく、大学生にも、経済・社会の現実への関心、キャリア意識を高めることや、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力の向上が期待されていたのは確かです。でもそれだけなら、いつものゼミ活動で十分です。コラボゼミという形式が有効なのは、大学生が「教えることを通じて学ぶ」ことができると期待されるからなのです。

大学内には「大学生が高校生とつるんでどうするの」という人がいました。今もいるかもしれません。でも、それはまったく一面的な見方です。

フランスの哲学者ジョセフ・ジュベールは「教えることは二度学ぶことである」と言いました。他人に教えてこそ、理解が深まり、知識は定着して、わがものとなります。

もっと身近に感じられる例として、プロ野球で活躍した落合博満氏の言葉も挙げておきましょう。選手としては、日本プロ野球史上、唯一、三度の三冠王に輝き、監督としては、四度のリーグ優勝、一度の日本一を成し遂げた名将です。落合氏は言いました（二〇二一年九月二日付の『日本経済新聞』「交遊抄」で東大野球部監督・井手峻氏が紹介しています）。

「選手を上手にしたいなら、他の選手に教えさせてみりゃいいんです。」

コラボゼミの風景

大学生は、高校生とのコラボゼミだと、研究テーマについて高校生よりも広く、かつ深く理解しなくてはなりません。本当に理解したうえで、高校生に分かるレベル、分かる言葉で内容を伝えなければならないし、場合によっては高校生と同じレベルで考え、ともに学ばなければなりません。そのためには、入念な準備が必要です。まさに「教えることを通じて学ぶ」のです。単なるレトリックではありません。

大学にとって、高大連携とは、優秀な学生を獲得するために行われる、高校への一方的施しではありません。学生教育にも大きな見返りがあるものなのです。だからこそ、大学側も真剣に取り組む必要があります。

広く全国に目を向ければ、大学を中退する学生、就職後三年以内に辞めてしまう大学卒業生、進学も就職もしない大学卒業生（いわゆるニート）の増加が社会問題化している事情があります。人生というスパンでキャリア意識を育む機会の必要性は、高校ばかりではなく、大学でも高まっています。コラボゼミは、そうした機会のひとつであり、やりようによっては、どの大学、どの高校でも実現可能です。

続く第二章では、コラボゼミの具体的内容の説明に入っていきましょう。

第二章　コラボゼミの具体的内容

第一節　日本企業のケーススタディ――「世界は誰かの仕事でできている。」

「教材」としての企業

コラボゼミの参加人数は、矢野ゼミ三年生・高経附三年一組生徒の数によって変わりますが、毎年、大学生一五名・高校生三五名ほどが集まります。これを大学生二ないし三名、高校生五ないし七名で構成される六つのチームに分け、合計七名から一〇名の規模でコラボゼミを行ってきました。具体的にやりとりし、議論するには、いい感じの人数です。

テーマは、日本企業の海外戦略を中心に据えてきました。大学はともかく、高校では企業のケーススタディが行われる

ことはほとんどありませんが、日本企業を「生きた教材」として経済の具体的現実に迫ろうとしたのです。

二〇一〇年、コラボゼミ開始当初の「問題意識」は、以下のようなものでした（矢野 二〇一一）。

日本ではデフレが長期化するとともに、少子高齢化が進み、市場は縮小傾向にある。日本企業は市場を海外に求め、アジアをはじめ成長著しい新興国でのビジネスを拡大している。

このことは、高校生にとって身近な群馬、高崎を含めた日本の経済、社会にどのような影響を与えるのか。空洞化を引き起こすのだろうか。あるいは、企業の海外展開によって新興国の需要を「内需化」することで国内雇用が守られ、高齢化社会を支えることになるのか。

日本企業がどのような経営戦略で海外に展開しているのかを具体的に研究することによって、地域経済をも揺さぶる世界経済の動きを知る。地域完結の研究姿勢では、地域のことは分からない。グローバル人材を育成するにも、地域を支える人材を育成するためにも、広く世界に目を向けた研究を進めよう。

こうしてコラボゼミは、当初から「グローカル」という視点を重視しながら行われる企業研究だったわけですが、高校生だけではなく、実のところ大学生も、企業についてそれほど詳しいわけではありません。

財閥系の名前がついた大企業なら知っている。自分たちに最終消費財・サービスを供給する企業なら何となく分かる。銀行や保険会社、証券会社も、細かな業務内容はともかく、名前ぐらいは聞いたことがある。しかし、たとえば、いわゆる「Ｂ ｔｏ Ｂ」企業は、大小問わず、ほとんど知りません。就活だ、インターンだと焦る割には、プロ同士でやりとりする圧倒的多数の会社を含め、サプライチェーンを形成するそれぞれの企業について、名前も業務内容も、意外と知らないのです。だから、高校生にも大学生にも言い聞かせてきました。

「世界は誰かの仕事でできている。」

日本コカ・コーラ社「ジョージア缶コーヒー」の有名なキャッチコピーです。発表以来、世の中の実相を伝え、いろいろな分野で働く人々を勇気づけたこの言葉は、コピーライター梅田悟司氏によって編み出されました。

いつの頃からか、私はコラボゼミ開始前のオリエンテーションで、必ずこれを紹介するようになりました。大学生も、

高校生も、コラボゼミを通じ、「世界は誰かの仕事でできている」ことを実感しよう。そして、近い将来、その「誰か」になろう。コラボゼミは「誰か」になるきっかけだよ、と。

コラボゼミの具体的プログラムは、大きく三つの柱から成り立っています。順に説明していきましょう。

コラボゼミ第一の柱――「円ダービー」を活用した為替レートの研究

まず第一に、日本企業の海外戦略に大きな影響を与える「為替レート」の研究です。企業の海外戦略を左右する円ドルレートに関心を持たせるため、日本経済新聞社が二〇〇一年以降、二〇年以上にわたり毎年開催している「円ダービー学生対抗戦」に参加してきました。

円ダービーでは、参加各チームが主催者指定期間における月末の円ドルレートを数次にわたり予想します。予想値と実際値との乖離差合計によって順位を決めるコンテストです。中学校から大学まで参加可能ですが、メンバーの学校種が異なるグループは不可です。議論はコラボゼミで積み重ね、コンテストそのものには高校生グループ、大学生グループという形で個々別々に参加してきました。

ひと月後の為替レートの水準が正確に導き出せる経済理論や分析道具など存在しません。それでも「予想」しようとすれば、毎日の為替レートを追いかけてトレンドを知るほか、国際金融の動向に影響を与える会議、統計数値、事件・事象に目を向ける必要があります。

まじめに為替レートを予想しようとすれば、日頃は右の耳から左の耳へと通り過ぎていた国際政治や経済のニュースに耳を傾け、新聞に目を通さなくてはならない。そして、それを自分なりに分析し、円高・円安の具体的要因を挙げながら、グループ内で意見を交換せねばならない。根拠のない話は聞いてもらえない。

円ダービー学生対抗戦は、高校生にとっても、大学生にとっても、現実の経済に関心を持つ「きっかけ」として、非常に有効なプログラムです。単に「当たった」「外れた」よりも、円高・円安の合理的要因、具体的根拠について意見を出し合いながら、ひとつの結論を導くという、予想を導き出す「プロセス」こそが重

2001 年第 1 回円ダービー全国優勝

要です。まぐれで当てるぐらいなら、「合理的に外せ」とまで言ってきました。

とはいえ、コラボゼミ開始後の円ダービーでは、入賞し、日経新聞紙上に名前が載ったり、分析手法について「ユニーク賞」をいただいたりしたこともあります（ちなみに、コラボゼミ開始以前、二〇〇一年の第一回円ダービーで、矢野ゼミのチームは全国第一位に輝いています）。

円ダービーへの参加は、企業戦略に影響を与える為替レートに関心を持つことだけではなく、企業研究に向けたグループ学習、話し合いの「きっかけ」としても重視しています。「正解」なんて簡単には見つからないんだから、まずはお互い、気軽にゲーム感覚で話し合って打ち解けようという趣旨です。

コラボゼミ第二の柱――企業のケーススタディと本社訪問・インタビュー

第二に、日本を代表する六企業のケーススタディと企業訪問です。高校生・大学生が六つのグループに分かれて、まずは担当企業のホームページや新聞・専門誌のニュース、会社四季報、関連学会誌などで、各企業の沿革、中期経営計画、同業他社を含めた市場の動向、海外進出先の状況を調べあげます。このあたりは、大学生によるリーダーシップの発揮のしどころです。

こうした研究成果をもとに「実際に企業の東京本社に出向き、担当者にインタビューする」という内容となっています。「第二の柱」と書きましたが、具体的課題に協調して対処し「学びのきっかけ」にするためのコラボゼミにおいて、メインコンテンツに他なりません。

高校生も大学生も、大企業の東京本社に足を踏み入れた経験などありません。そこを訪問し、担当者に自ら質問を投げかけるわけです。質問の仕方、その内容で、相手をしてくれるビジネスパーソンはこちら側のレベルが分かってしまうんだよと、私から言われれば、恥をかかないためだけにも、メンバー全員、きちんと調査し、分析せざるをえません。

大学生にとっては、特にそうなります。チューターとして緻密なケーススタディを主導したうえ、企業の本社を訪問し、高校生とともにインタビューを行うことは、大学三年生にとって、（それをメインの目的に据えていないものの）結果的に「就職活動の予行演習」にもなっています。

最終的に、こうしたプロセスで得られた研究成果を、数百名にのぼる聴衆の前で発表するのが課題です。プレゼンの主役となる高校生、それをサポートする大学生とも、互いに協力し真剣に取り組まざるをえません。

コラボゼミ第三の柱――英検・ＴＯＥＩＣを活用した英語学習の推進

そして第三の柱は、学生・生徒による英語学習の推進です。高校生は毎年六月の実用英語検定試験、大学生は五月のＴＯＥＩＣに向けて、それぞれが英語学習を進めることを高大コラボゼミの共通課題としてきました。

海外戦略や人材登用をにらみ、今や日本でも、英語の公用語化に踏みきる企業が出始めています。大学・高校で英語を学ぶ意味を認識させるうえでも、そして「日本企業の海外戦略」をテーマとする以上、高大コラボゼミでは、英語学習を外せないとの趣旨で、当初から柱のひとつに据えてきたのです。

もちろんここには、コラボゼミの一方で、受験勉強に弾みをつけなくてはならない高校三年生に対し、英語の勉強を促すという目的もあります。こんな言葉で励ましてきました。

「一粒で二度おいしい。」

昔懐かしいグリコ・アーモンドキャラメルのキャッチコピーです。コラボゼミは、目先の受験の成果を直接追い求めるものではありません。でも結果的に、受験勉強にも役立つプログラムなんだとイメージしてもらうことは、コラボゼミに取り組む高校三年生にとって、モチベーションの点でもマイナスではありません。

高校生には（もちろん大学生にも）、コラボゼミで使う資料、ニュース記事だって英語の勉強になるんだよと伝えています。

たとえば、ある日、グループ全員で読んだ新聞記事に「ＳＥＣ」という言葉を見つけたとします。これを「ＳＥＣ＝米国証券取引委員会」とだけ記憶するのではなく、「ＳＥＣ＝Securities and Exchange Commission＝米国証券取引委員会」として覚えれば、英単語の知識が増えます（確認するまでもなく「security」には「安全」「安全保障」の意味もあります）。ついでに、その歴史や機能について簡単に書き加え、ノートにまとめていけば、経済専門用語についても学べます（「証券化（securitization）」も書き加えて）。

このひと手間を、記事や資料で見つけた「Ｍ＆Ａ（企業の合併・買収）」でも、「ＲＯＥ（株主資本利益率）」「ＢＣＰ（事業継続計画）」「ＢＯＰ（貧困層）」でも行えば、英単語と経済の知識はどんどん増えていくはずです。

高校生には、こんな風にコラボゼミを（いや、その他いろいろな授業も）受験勉強の機会にすることが可能だ、「一粒で二度おいしい」どころか、「一粒で何度でもおいしい」も可能だ、要は取り組み方次第だと伝えています。大学生には日々

コラボゼミの風景

のゼミで口を酸っぱくして言っています（もちろん皆が真面目に耳を傾け、実践しているとは言いがたいのですが）。

ちなみに「一粒で二度おいしい。」と聞いても、高校生・大学生はポカンとしています。グリコ・アーモンドキャラメルなど食べたことがないからです。ですから、オリエンテーションや初回のコラボゼミでアーモンドキャラメルを配ったことがありました。「これが、一粒で二度おいしい、ということだ。味覚で記憶し、実践に移せ」と発破をかけてきたのです（高崎あたりのスーパーだと見かけなくなり、最近は配れていませんが）。

昭和のオッサンなので「あたり前田のクラッカー」なんて言葉も発していますが、よい子のお友だちは静かにスルーしてくれます。

とりあえあず、ここまでで、コラボゼミの趣旨、大まかな内容はご理解いただけたでしょうか。次節では、コラボゼミに取り組んできた高校生や大学生の具体的様子などを紹介しましょう。

第二節　コラボゼミの一二年

走りながら考えた

ざっと整理すれば、コラボゼミの内容は以上で述べたとおりなのですが、事前に綿密な計画を立てたうえで始めたわけではありません。予算を含め、細かな内容は走りながら考え、整えてきた面があることは否定できません（文科省のＳＧＨ選定など、コラボゼミ開始から四年後です）。

教員は、高・大ともに「本業」がありますので、コラボゼミに割ける時間や資源は限られています。しんどいことも多々ありました（特に高校の先生方にとっては「重荷」だったと思われます）。でも、毎回目を輝かせながらやってくる高校生に励まされてきました。日頃の授業や部活、受験勉強があるのに、それでもコラボゼミの内容に興味を持ち、このプログラムを通じて、いろいろなことを学びたい、成長したいと思う子供たちの前に中途半端な気持ちでは立てませんでした。

参加した人たちにとってコラボゼミとは何だったのか。どんな効果があったのか。コラボゼミを「修了」し、大学・高校を卒業していった人たちへのアンケートについては、次章で扱うことにして、本節では、コラボゼミの一二年間を簡単に振り返っておきます。

「経済」に向き合う

コラボゼミでは、実在する日本企業を研究対象としてきました。普通の高校では、企業を教材にすることは、あまり一般的ではありません。今でこそ学校における金融教育の必要性が叫ばれていますが、ゼニ・カネを扱わざるを得ない企業の研究などタブー視されていたのではないかと思われるほどです。

現在は恒例となっている次年度コラボゼミ参加予定生徒への事前オリエンテーションでは、必ず以下の言葉を伝えています。

「経済に無関心でいるのは自由だが、経済と無関係でいるのは不可能である。」

世の中はゼニ・カネで回っている。高校生のみんながそれを意識せずに暮らせているのは、経済の真っ只中で働いてくれる保護者がいるからだ。

社会科学では、社会がどのような仕組みで動いているのか、考察する。経済学では、マネーの動きでそれをみる。マネーの動き方・使われ方次第で、世の中は良くも悪くもなる。タブー視していたのでは何も学べない。

コラボゼミの風景

コラボゼミでは、企業を具体的に研究することによって世の中を見つめ、皆さんにとって大切な、今ここにある「身の回り三メートルの世界」がそこだけで完結するのではなく、より大きな時空とつながっていることを理解するきっかけにしてほしいと伝えています。高校時代から経済に向き合うことによって、人生というスパンで進路・キャリアを考えてほしいとも。「世界は誰かの仕事でできている」のですから。

「企業選び」という課題

というわけで、コラボゼミにとっては、研究し訪問する企業の選定が最重要です。これが決まらないことには、話が進みません。

一二年間の訪問企業は〈表1〉にあるとおりです。数多くの企業に受け入れていただきましたが、毎年、訪問企業の選定はひと苦労です。

近年、多くの企業がパブリック・リレーションズやCSR（企業の社会的責任）を果たすための活動に熱心なのは確かです。しかしながら、高校生と大学生が数ヶ月にわたり研究したテーマで生じた疑問について、直接訪問し、担当者にインタビューさせてくださいと申し入れても、そう簡単にはいきません。「社会的責任」だからと、すべての企業がすんなりOKとなるわけではないのです。コラボゼミ開始当初は、特にそうでした。

いざ受け入れ可能となっても、微妙な質問事項によっては、成果発表を控えている以上、企業側との細かなやりとりが必要になる場合もあります。ホームページにすでに掲載されている内容を下手な言葉で聴衆に伝える準備のため、茶飲み話をしに行くわけではないからです（〈表1〉中に実名を挙げていない会社もあるように、協力してくれた企業ですら、受け入れの公表を渋る場合があります）。

最初の二年（二〇一〇年／二〇一一年）は、個人的なコネクションを頼りに何とか受け入れてもらいましたが、毎年となると続かないのは明らかでした。そこで二〇一二年度以降、外部団体に協力を仰ぎ、この問題の解決を図りました。

「高・大・産・老」連携モデルとしてのコラボゼミ

協力を要請したのは、東京都千代田区内神田に本拠を置く認定特定非営利活動法人「経営支援NPOクラブ」という団体です。豊富なビジネス経験を持つ大企業OB・OGによって組織され、二〇〇二年の創設以来、販路開拓・商品開発などで中小企業を支援してきた組織です。今では、次世代の育成にも力を入れています。

私たちにとって幸運なことに、高崎経済大学経済学部経済学科の二〇一一年度前期「特別講義」に講師を派遣していただいたのが縁で、コラボゼミの趣旨を説明したところ、訪問企業の選定に協力していただけることになったのです。

高経大と高経附の「高大連携」と言いますが、企業の協力がなければ成り立ちませんから、実は「高・大・産」連携です。そして、企業との仲介役を引き受けてくれる退職者がおられなければ持続困難なので、コラボゼミは「高・大・産・老」連携モデルと言ってもいいでしょう。

〈表１〉「高大コラボゼミ」訪問企業一覧

2010 年度
トヨタ自動車　住友商事　キリンホールディングス　資生堂　電通　大手食品企業＊
2011 年度
丸紅　三菱マテリアル　ヤマトホールディングス　JFE スチール　エーザイ
森永製菓
2012 年度
コマツ　日立化成　三井住友建設　三菱食品　三井造船　三井物産
2013 年度
富士フイルム　日産自動車　ライオン　富士ゼロックス　電気化学工業　三井化学
2014 年度
清水建設　日立製作所　全国農業協同組合連合会　コクヨ　KYB　大手食品企業＊
2015 年度
トヨタ自動車　三井物産　三菱重工　日本水産　東燃ゼネラル石油　資生堂
2016 年度
コマツ　アサヒビール　住友重機械工業　JAL　三井海洋開発　三井造船
2017 年度
商船三井　東レ　デンカ　富士ゼロックス　ニチレイ　日本工営
2018 年度
IHI　三菱商事　JAL　明治　テルモ　キユーピー
2019 年度
富士電機　富士通　ANA　三井物産　日清オイリオグループ　鉄人化計画
2020 年度
江沼チエン　ヤマトホールディングス　サイボウズ　デジタルデータソリューション
みやま　大手グローバルテック企業＊
2021 年度
IHI　A コープ東日本　JP ホールディングス　デジタルデータソリューション
グローリー　スマートキャンプ

＊…訪問受入について企業名の公表を控えるよう要請された会社。

「老」の表現は、やや失礼かもしれませんが、経験と人脈が豊富で、気力も能力も高い企業ＯＢ・ＯＧが第一線を退かれた後、次世代の育成に協力してくれているのです。「老」には「老師」のごとく、尊敬の意味を込めています。

現在の日本では、企業本体のみならず、業界団体、各経済団体、企業ＯＢ・ＯＧ、そして一般財団／社団法人などが様々な形の社会貢献活動に積極的です。どの企業もウェルカムというわけではありませんが、こちら側の趣旨や理念に賛同が得られれば、首都圏だけではなく地方でも、こうした組織から教育プログラムへの協力は取り付けやすいと思います。高経大と高経附のコラボゼミが普遍的モデルになりえるという根拠のひとつです。

コラボゼミ開講までに

走りながら考えてきたとはいえ、一二年もやっていると、スケジュールなども定着していきました。

高経大の場合、大学生は、二年の後期からゼミが始まり、授業のほか、様々な課題・行事を通じ、専門的研究を積み重ねています。三年前期のコラボゼミに向けた準備は、最初からある程度整っていました（私のゼミのテーマや手法などについては、矢野 二〇一一／二〇一三ａ／二〇一三ｂで紹介しています。コラボゼミは数多の課題のごく一部です。やや古いですが、ゼミの基本スタンスは変わっていませんので、興味のある方は、これらを参照してください）。

高校生に対しては、新年度のコラボゼミ開講前に、私が高経附に出向いてオリエンテーションを開いています。そこでは、コラボゼミの目的や内容、受験勉強との両立可能性などについて、キャッチフレーズを交えながら話します。それらについて、いくつかはすでに紹介しましたが、ほかに以下のようなフレーズでコラボゼミへの意欲を高め、クラスの雰囲気づくりにつなげようとしてきました。

「早く行きたければ一人で行け。遠くまで行きたければ皆で行け。」

～アフリカ起源とも言われる古い諺だよ。「ゼミ」なんだから「協力」しながらやっていこうね。何でも自分で背負うんじゃなくて。友だちから助けてもらう能力（受援力）を高めるのも狙いだから。「マネジメント」なんて、コラボゼミでこれからよく耳にするかもしれないけど、中身の半分以上は「受援力」だから～。

「受験は意外と団体戦。」

～これ、受験界の常識みたい。「協力し合う」クラスの雰囲気がみんなの成績向上につながるって。お互いに質問しあえる雰囲気を作ってさ、友だちから質問されたら、面倒くさがらずに丁寧に答えてやろうよ。「教えることを通じて学ぶ」んだから。分からない人に、分かるように説明しようとすれば、本当に分かっていなきゃだからね。理解が深まるよ。～

高校生への開講前オリエンテーションでは、ゼミという学びを通じた「協力」の重要性をまずは訴えてきました。

コラボゼミの開講

実際のコラボゼミは、大学と高校の行事予定をすり合わせながら、四月から七月まで、毎年八回ほど行われてきました。高体連、文化祭、期末試験などがありますから、この期間に八回の対面式コラボゼミを実施するのは、そう簡単ではありませんでしたが、何とか調整してきました。

四月の初顔合わせは、大学生・高校生とも緊張の面持ちです。でも肩慣らしの円ダービーで打ち解け、高校生が円ドルレートの予想をみんなの前で発表する頃には、議論のベースはできあがっているように思います。円ダービー以後は、六グループとも担当企業のケーススタディを本格化させます。

上で述べた通り、訪問先は教員サイドで決めましたが、各企業のどういった「戦略」を研究対象とするかは、それぞれのグループに任されました。大学生・高校生が、各企業の沿革、業務内容、同業他社の状況、世界市場の動向等を分析し、話し合いながら、「太陽光発電事業の国際的なシェア拡大に向けて」「スポーツビジネスの将来―日本はサッカーの国になれたか」「海外銅鉱山権益とリサイクル事業」など、個別の研究テーマを決めていきました

本当のところを言えば、コラボゼミ序盤に円ダービー参加を入れるのは、訪問企業を最終決定するまでの「つなぎ」という意味もありました。経営支援ＮＰＯクラブの協力があってもなお、年度初めにすべての企業が決まるのは稀でしたから、できることをやろうということで、春休みの共通課題図書（たとえば、茂木誠著『経済は世界史から学べ！』ダイヤモンド社、二〇一三年や南博・稲葉雅紀『ＳＤＧｓ―危機の時代の羅針盤』岩波新書、二〇二〇年など）についての意見交換を行ったり、円ダービーに取り組んだりしてきたのです。

話し合いの本格化

例年、六月以降のコラボゼミは毎回、各グループが資料を持ち寄って情報や意見を交換し、細かな論点、本社での質問事項を詰めていきました。高校生は、前回出された課題への答えを発表しなくてはなりませんし、大学生は適切に議論をリードしなくてはなりません。まさにゼミナールの雰囲気でやりとり、話し合いが続きます。

大学・高校の教員は、コラボゼミの最中、それぞれのテーブルを回り、議論に耳を傾けたり、話し合いをファシリテートすることはありましたが、「関わりすぎ」は自重しました。主役はあくまでも高校生と大学生です。

コラボゼミは、基本的に一回九〇分。私が毎回、挨拶代わりに、各回の統一テーマ、目標について話し、確認したあと、グループワークに入ります。コラボゼミ開始当初は、各グループでの議論ののち、最後の一〇分ほどで、高校生、大学生とも、当日の研究内容や達成度についての感想や評価を短いレポートにまとめました。まとめられたレポートを読みながら、担当教員が各グループの研究の進捗状況や学生・生徒それぞれの関与度などをチェックし、次回以降に生かすというプロセスでコラボゼミが進められました。後述のように、最近では、コラボゼミにもDX（デジタル・トランスフォーメーション）の波が来ていますので、情報交換や教員による関与の仕方が変化しつつあります。

こうしてコラボゼミが進められるわけですが、互いの進捗状況や研究テーマ、論点を確認したり、プレゼンの練習をしたりするために、途中で各グループによる中間報告を実施しています。高校生による中間報告は、高経大留学生を前に、英語で行われることもありました。

コラボゼミの風景

企業訪問・インタビュー

七月の最後のコラボゼミが終われば、いよいよメインの企業訪問、インタビューです。ある程度の質問事項・論点をまとめて、あらかじめ先方に送り、八月後半の企業訪問に備えなくてはなりません。一堂に会してのコラボゼミは七月で終了ですが、以後は、企業訪問と成果発表会に向け、必要に応じ、各グループごとに随時話し合いがもたれました（最近は、企業訪問日がやや前倒しになっています。また訪問後、発表会に向け、リハーサル以外に一度、全体で集まっています）。

一二年のうち最初の八年間（二〇一〇年から二〇一七年まで）は、八月の第四・金曜日、高校生・大学生とも高崎から新幹線で上野に向かい、上野駅で各グループに分かれて、本社所在地に向かっていました（その後、二年は予算の関係上、高校生・大学生別々のバス移動、直近二年はオンライン訪問です）。

大学生はスーツ、高校生は制服を着用し、服装・髪型・髪色・身だしなみは、大企業の東京本社を訪問するに相応しいものを求めました。道中の立ち居振る舞いも同様です。こうしたことも含めてのコラボゼミです。

外見で人を評価してはならないと言われます。そこに真実があるのは確かですが、コラボゼミの参加者には、オスカー・ワイルドの言葉の意味も、併せて伝えてきたつもりです。

「外見で人を判断しないのは愚か者である。」～『ドリアン・グレイの肖像』より

六グループには、高校・大学の教員が引率者として同行します。企業によって若干異なりますが、各グループとも、一時間半から二時間のインタビューとなります。どの企業の対応も非常に良く、拙い質問にも丁寧に答えていただきました（ランチまで用意し、気軽に会話する環境を整えていただいた企業もありました）。企業本社という特別な空間で、ビジネスパーソンから、仕事上のやりがいや悩み事を含め、直接様々なアドバイスまでいただけるのは、学生・生徒にとって貴重な学びの機会となりました。

施設見学

インタビュー終了後は、グループごとに昼食をとり、午後の見学場所に移動します。交通費をかけ、わざわざ東京に出ているので、企業訪問後、すぐ帰路につくのではなく、コラボゼミにふさわしい場所を引率教員・大学生・高校生全員で見学しました。

毎年、見学場所を変え、具体的には「東京証券取引所（東証アローズ）」「クロネコデータセンター」「羽田クロノゲート」「日本銀行金融研究所貨幣博物館」「アドミュージアム東京」といった施設をめぐり、見聞を広めました。

企業訪問

見学後は、出発時間まで上野駅界隈で、あるいは新幹線の車中で、各グループごとにインタビュー結果について話し合い、記憶と印象が薄れないよう、成果発表会への準備作業を行っていました。大学生・高校生が一堂に会する機会は、このあとそれほど多く作れないので、時間は有効に使おうという趣旨です（二〇一八年、二〇一九年とバス移動になってからは、この時間が共有できなくなりました。それもあり、訪問後、全体会合の機会を設けるようになりました）。

大企業の東京本社を訪問し、担当者にインタビューするのが日帰りで可能なのも、東京に近い高崎の地理的条件があればこそです。こうした条件を活用しない手はないということで始めたコラボゼミであり、企業訪問なのですが、二〇二〇年、二〇二一年は、新型コロナが大きな壁となって立ちはだかりました。オンライン訪問を余儀なくされた状況（午後の施設見学もなし）については、最後にまとめます。

いよいよ成果発表会

コラボゼミの集大成は、共同で積み上げてきた研究、インタビュー結果に基づく成果発表です。企業訪問後、高校生は、成果発表会に向け、総合学習の時間を用いて（あるいは休み時間、あるいは放課後、つまりは、少しでも空いている時間を見つけて）、それぞれのグループでスライド資料を作成し、発表要旨をまとめます。大学生は、高校に出向くなどして資料づくりをサポートしてきました。

発表内容について、生徒には、とにかく単なる企業の広告・宣伝にしないこと、自分たちの「問題意識」を前面に出すこと、そのためには、批判や注文、提案があってもいいことを伝えてきました。

例年九月第一週に成果発表会のリハーサルを行い、高校生・大学生共同で、資料や要旨、プレゼンテーションを最終チェックします。発表内容によっては、私や三年一組のクラス担任、あるいはクラスメートや学生から鋭く突っ込まれます。誤字・脱字やスライドの見づらさ、規定時間オーバーなど、あまりにも当たり前の指摘を受け、不甲斐なさに泣き出す生徒もいました。

そんなこんなのリハーサル終了後、高大の教員は毎年、不安がよぎります。数ヶ月にわたり、ともに学び、企業本社を訪問して、もはや妹、弟を見る目になっている大学生も同じ気分だったでしょう。果たして、本番やいかに……。

当初、成果発表会は、九月第二・土曜日に定例化していました。発表会には、来賓（経営支援ＮＰＯクラブ関係者など）、高経大・高経附教員・事務職員、市教委関係者、大学生、高校生（高経附生以外に群馬県内のＳＧＨ指定校であった中央

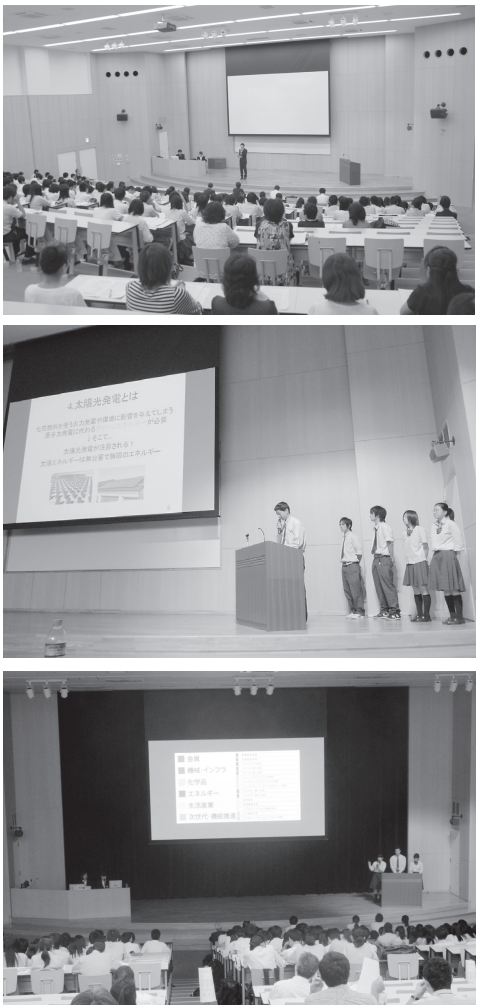
中等教育学校生などを含む）、生徒保護者、一般市民（高経附受験を考える中学生親子を含む）、マスコミ関係者、他県からの視察団など、三〇〇名近くが高崎経済大学の大教室に集まりました。その様子は、毎年、地元のテレビや新聞でも報道されました。

研究成果を発表する主役は高校生ですが、近年では、ステージ上でのグループ入れ替えの寸暇を縫って、大学生がオープニング・スピーチを英語で行うことが恒例となりました。そのあと、同じく各グループとも高校生代表が英語で挨拶をすることも恒例化しました（グループ代表だけあって、高校生のほうが上手いかなと思うこともしばしばです）。

発表会では、高校生の作成した報告要旨、大学生作成の補足資料を聴衆全員に配付したうえ、高校生が各グループごとに、パワーポイントを用いて発表します。大学の階段式大教室で、しかも大勢の人々を前にしますから、高校生はバリバリ緊張していますが、涙のリハーサルも功を奏し（！）、毎年堂々とした発表ぶりです。

泣ける！　コラボゼミ

リハーサルまで甘さの際立っていた高校生が短時間で本番に合わせる様子を目のあたりにすると、若者の成長力、成長スピードには驚かされます。もちろん、そこには大学生の献身的な協力もあったのでしょう。コラボゼミの高校側への浸透状況を反映するように、プレゼンテーションも、フロアからの質問に対



成果発表会

する応答も、年々上達していきました。

コラボゼミの集大成、成果発表会終了後の会場は、大げさではなく「ありがとう」で溢れかえっています。あちこちに安堵感、達成感に満ちた笑顔があり、大学生と高校生がいつまでも記念撮影に興じています。泣きながら、最後まで別れを惜しむ姿は感動的で、年齢とともに緩くなるばかりのこちらの涙腺も決壊寸前になることがしばしばです。

そう、コラボゼミでは「泣ける」のです。悔しくて泣き、うれしくて泣ける。高校生への開講前のオリエンテーションでは、それも伝えています。

「泣く体験」の共有は、最近では企業の組織マネジメントでも注目され「涙活（るいかつ）」なる言葉まで生まれています。最後に泣けるだけの経験を共有できるかどうか。コラボゼミについて私が密かに設定した目標です。

英検二級以上合格者への表彰

涙と感謝の言葉で満ち溢れた発表会後の会場では、「修了式」の一環で、実用英語検定二級以上を取得した高校生の表彰も行ってきました。オリエンテーションではこのことも伝えます。英検二級は大学入試に向けた基礎学力の道しるべになる。二級以上が取れたら、私がポケットマネーでささやかな記念品を進呈するよ、と。

「図書カード」のニンジンがどれほど功を奏したか、分かりませんが、最近では、高経附三年一組生徒の七割以上が英検二級以上を取得するようになりました。二〇一〇年は、三六人中たった三人（！）でしたから大躍進です（〈表2〉参照）。学力が低かったというより、当時の高経附には、英検の全校受験というカルチャーがなかったのです。そもそも受検者が少なく、分母に応じ合格者も少ないという状況でした。

わずかひとクラスとはいえコラボゼミを実施し、全校受検を働きかけ、文科省のＳＧＨ指定を経て、今では高経附生全

成果発表会後の「修了式」の風景

員が実用英語検定試験を受けるようになりました。近年では、準一級合格者も輩出しています（一級はさすがに難しいですね）。英検も二級以上になると、大学の推薦入試などで判断材料のひとつとされることがありますので、コラボゼミは、やはり「二度おいしい」のかもしれません。

第三章　コラボゼミの意義と卒業生の声

第一節　コラボゼミ開始後の展開

各方面からの反響

類例があまりなかったこともあり、コラボゼミ開始後は、キャリア教育や高大連携のモデルケースとして、専門誌や新聞・テレビを含め、各方面で取り上げられました。

たとえば、キャリア教育では、予備校や人材育成・就職情報会社の雑誌で取り上げられました（河合塾『Kawai juku Guideline』二〇一二年七・八月号、リクルート進学総研『Career Guidance』四〇四号、二〇一四年一〇月など）。「どんな高校生が大学や社会で伸びるのか」を目的に、京都大学高等教育研究開発推進センターと河合塾が行った調査研究でも、高経附はインタビュー対象になりました（溝上 二〇一五）。

高崎経済大学産業研究所（現・地域科学研究所）のプロジェクトで「高大連携」についてまとめたこともあり（矢野 二〇一三a／二〇一三b）、私自身も、高大連携や大学の少人数教育をテーマとするシンポジウムやＦＤ研修会に呼ばれることもありました（大学コンソーシアム京都・高大連携事業部「高大連携教育フォーラム（第一二回）」二〇一四年一二月五日、大学コンソーシアム京都「ＦＤフォーラム（第二二回）」二〇一七年三月四日、公立大学協会副学

成果発表会後の「表彰式」

〈表２〉高経附３年１組　英検取得状況

	2011.3卒	2012.3卒	2013.3卒	2014.3卒	2015.3卒	2016.3卒	2017.3卒	2018.3卒	2019.3卒	2020.3卒	2021.3卒	合計
英　検１	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
英検準１	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	2	6
英　検２	3	6	10	11	17	12	18	23	24	21	27	172
英検準２	12	1	7	21	17	18	15	5	10	5	8	119

長等協議会「教育改革分科会」二〇一七年七月一八日、東北学院大学「ＦＤ研修会（第一八回）」二〇一七年一一月二日、宮城大学「高大連携シンポジウム」二〇一九年二月一八日など）。

高経大・高経附とも、各地から視察に来られましたから、北関東の地方都市でのささやかな高大連携が一定程度、注目を集めてきたのは確かなようです。

ＴＳＵＢＡＳＡプロジェクト

ここまでにも何度かその名が登場した「ＴＳＵＢＡＳＡプロジェクト」にも触れておきましょう。

これは、高経附が文科省ＳＧＨの後継として二〇一九年度から実施している事業です。「高崎市と世界をつなぎ、地域に貢献できる人材」「高崎市の特長を活かしたビジネス企業や環境保護活動等ができる人材」の育成を目指しています。これによって、文科省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」のアソシエイト校に指定されました。

「ＴＳＵＢＡＳＡ」とは「Take Steps Upwards, Building Advanced Social Ability」の頭文字をつなげたもので、「社会的能力を高めてワンランク上へ」の意味を込めた名称です。無理矢理感がなくはないですが、校章のデザインにも沿うし、若者にとって成長を感じさせる良いネーミングだと思います。

事業予算は高崎市が出しますが、二〇二〇年度からは三菱みらい育成財団「心のエンジンを駆動させるプログラム」の助成を受けていますし、事業の一翼を担う「ＩＣＴ学習」については、パナソニック教育財団からも助成資金を得ました。

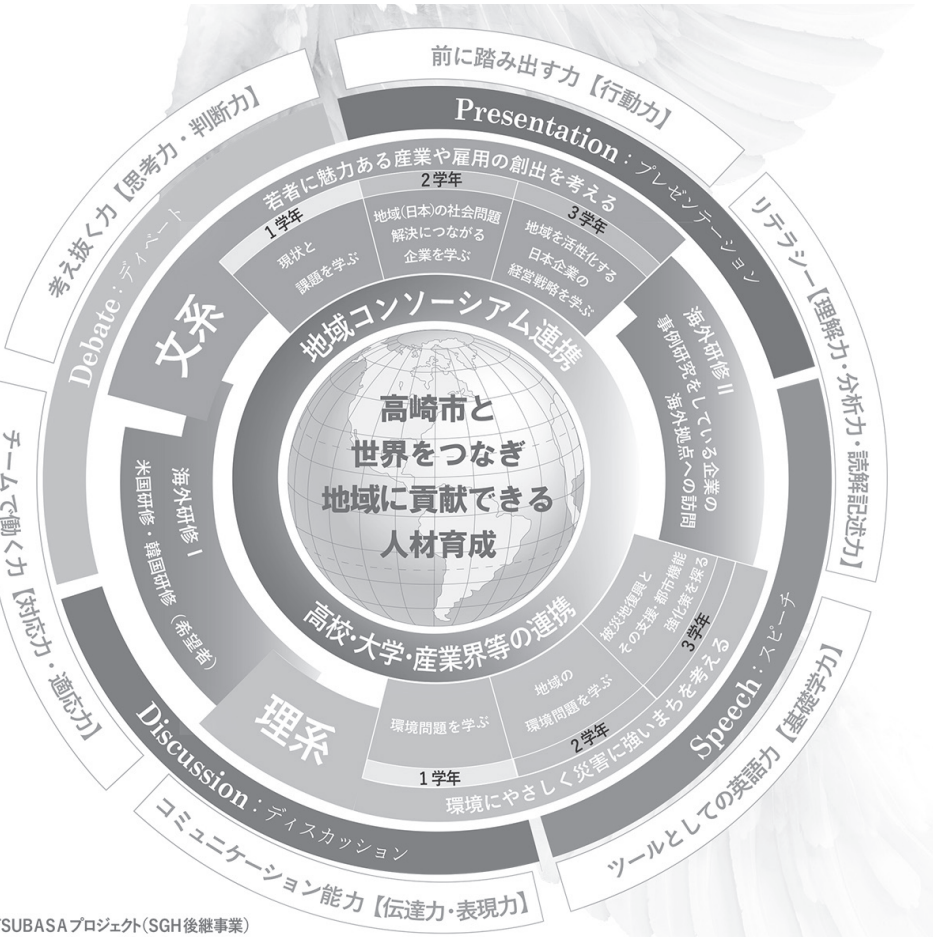
高校での「探究学習・課題解決型学習」について、文科省は「地域等の外部の資源」を活用しながら行う旨、「高等学校学習指導要領（平成三〇年告示）」で推奨しています。高経附は、今それを見事な形で実現しているわけです。高経大との連携は、ＴＳＵＢＡＳＡプロジェクトの柱の一つであり、コラボゼミは、その中核的コンテンツをなしています。

高経附のこうした発展を語るうえで、田口哲男氏の名前は外せません。

田口哲男氏との出会い

高経附の誕生は一九九四年ですが、高経大との本格的な「連携」が進んだのは、ここ一五年ほどのことです。二〇〇八年、高等学校課長として高経大事務局に在駐していた田口哲男氏と、当時、経済学部長を務めていた私とのちょっとした言葉のやりとりから、高大連携が具体的に進み始めました。

吉田俊幸学長（当時）の意向もあり、地域政策学部を含め、高経大各学科の教員による高経附生に対する小論文指導か



TSUBASAプロジェクト(SGH後継事業)
構想全体概要に係わるダイアグラム

高崎市立
高崎経済大学附属高等学校

ら本格稼働した高大連携ですが、あるとき、田口氏からアップグレードに向けたアイデアを求められました。それに応じ、私が提案したのがコラボゼミだったのです。

その後、高経附の校長に就任した田口氏は、高等学校課長時代から（いや、おそらくは高校教員として長らく）熟成させていた自身のアイデアの実現に踏み出しました。文科行政に詳しく、化学を専門とし、他校でＳＳＨ（スーパーサイエンスハイスクール）事業にも関わった経験を持つ田口氏は、今のＴＳＵＢＡＳＡプロジェクトの柱となっているプログラムのいくつかを開始するとともに、ＳＧＨへの申請・指定にまでつなげました。英検全校受検の道筋をつけたのも課長時代の田口氏です。

田口氏は、高経附の後、群馬県立吉井高校、桐生高校で校長を歴任後、明和学園短大を経て、現在は、共愛学園前橋国際大学短期大学部生活学科教授として活躍中です（高経大で非常勤講師もお願いしています）。アクティブ・ラーニングを含め「探究学習・課題解決型学習」についての著書もまとめておられますので、関心のある方はぜひ手に取ってみてください（田口 二〇一八／二〇一九／二〇二一）。

各学年文系オナークラスの取り組み

田口氏の手がけた制度改革において、高経大との連携、とりわけコラボゼミにとって重要なのは、高経附の第一学年から第三学年まで、一クラスずつ設けられた「文系オナークラス」の開設でしょう。オナークラスは、様々な体験プログラム、外部との連携によって、生徒の学ぶ意欲を高めることを目指したもので、理系にも各学年一クラスずつ設けられています。

内容について、詳しくは高経附のＨＰやパンフレットなどで確認いただくとして、たとえば文系オナークラス・一年一組の生徒は、世界展開する高崎の中小製造企業（キンセイ産業・昭和電気鋳鋼・秋葉ダイカスト・サイトウティーエム）社長からの講話に耳を傾け、工場を実際に訪問します。ディベートを経験し、ビジネスプラン・コンテストや群馬県立女子大学による「イングリッシュ・セミナー」にも参加します。

二〇二〇年度、二〇二一年度は中止になってしまいましたが、経済学部・名和賢美教授による「型作文」指導が定着し、ここで学んだ高校生が今度は市内の小学生を教えるという試みもなされました。

二年一組では、高経大経済学部生と協力しながら「ストックリーグ」（日本経済新聞社主催の株式投資コンテスト）に参加するコラボゼミが実施されます。生徒は自らの視点でポートフォリオを組むなかで、社会的課題の解決に向けた投資の活用について学んでいきます。経営学科教授だった平井裕久氏（現・神奈川大学教授）のゼミとの間で始まった二年の

コラボゼミは、毎年のようにストックリーグで入賞チームを出しました。

今では、経済学部経営学科・阿部圭司教授のゼミ（三年生）が引き継ぎ、阿部教授には、大学院経済・経営研究科長で多忙な中でも高大連携に協力いただいています。ストックリーグを活用した二年のコラボゼミも、後発ではありますが、定着したと言ってよいでしょう。

そして、三年のオナークラスで取り組むのが、本冊子で紹介してきたように、日本企業をケーススタディの対象とするコラボゼミです。コラボゼミがまず三年一組から始まり、二年一組、一年一組へと連携が浸透していきました。

三年一組は、コラボゼミ開始後、しばらくは「高経クラス」と呼ばれていました。高経大を志望する生徒が集まるクラスではなく、総合学習の時間を用いて、高経大に出向くなどして教員・学生と連携しながら、様々なことを体験し学ぶクラスという意味です（文系だけれども、受験を見据え、数学を重視するクラスでもありました）。

コラボゼミから中小製造企業研究への橋渡し

制度的に文系オナークラスは、各学年で入れ替え可能ですが、今ではここでの学びを目指して高経附に入る生徒も多く、三年のコラボゼミに参加する生徒のほとんどは、第一学年からの持ち上がりです。つまり、意欲のある生徒が一年・二年の上記プログラムを経験したうえで、企業研究に取り組むプロセスができあがっているわけです。

ちなみに、一年文系オナークラスのプログラムについて、高崎の中小製造企業の協力を得たことが、のちに本学地域科学研究所による一連の「製造業研究プロジェクト」につながりました。この橋渡しを実現するとともに、一年一組による高崎市内中小製造企業研究のオリエンテーションを行っていただいているのが、地域政策学部の西野寿章教授です。

２年のコラボゼミ（阿部教授指導）

西野教授は、旧・附属産業研究所時代から長年にわたり、地域科学研究所の研究プロジェクト、地域貢献に尽力してこられましたが、彼のおかげで、コラボゼミという一つのチャレンジが発足当初は意図しなかったような波及効果をもたらすことになりました（この間の事情、プロジェクトの研究内容については、高崎経済大学地域科学研究所編『地方製造業の展開―高崎ものづくり再発見』日本経済評論社、二〇一七年、同『地方製造業の躍進―高崎発ものづくりのグローバル展開』日本経済評論社、二〇二二年を参照してください）。

第二節　コラボゼミ卒業生へのアンケート

卒業生アンケートの実施

コラボゼミの内容、一二年間の取り組みの概要は、以上述べてきたとおりです。高大連携と言えば、良質の入学生を確保したい大学と、生徒をとにかく大学に送り込みたい高校との間で行われるものとの認識がいまだに一般的かもしれません。でも、コラボゼミでは、入学試験という「高大接続」部分を無視はしないけれど、成果を大学入学実績で測定することは、端から念頭にありませんでした（「一粒で二度おいしい」と焚きつけはしても！）。

何度か言及したように、後期中等教育・高等教育に求められている内容、社会的情勢の変化を踏まえ、「人生」というスパンで、学生・生徒の「学び」の意識、「学び」方、進路・キャリア意識を育むことを目標にしてきました。

では、その目標はどれだけ達成できたでしょうか。なかなか定量化しにくい目標です。達成度をどうやって測ればいいでしょうか。

客観的指標は見いだしにくいのですが、幸い、コラボゼミ開始後、一〇年以上が経過し、今や国内外で（まさに、グローカルに）活躍しているコラボゼミ修了生が数多くいます。コラボゼミを立ち上げ、長らく運営に携わってきた者として、客観的指標とは言えないまでも「手応え」を確かめるとともに、今後の運営に生かすことを目的に、昨秋（二〇二一年）、アンケートを実施しました。

今回のアンケートでは、コラボゼミを修了した高・大の卒業生（二〇二一年三月までの卒業生は高経附三九九人、高経大一三九人）に対し、高・大で若干内容は異なりますが、「今、振り返ってみて、あなたにとってコラボゼミとは何だったのか」を尋ねました。後述のように、アンケートには、少し背伸びをして大学での学びを体験し、日頃意識しない「経済」の現場を垣間見た元・高校生、「教えることを通じて学ぶ」とともに、ビジネスパーソンとの直接的なやりとりで示唆を

得た元・大学生の声が反映されています。

アンケート結果を概観する前に、まずは、大学と高校に残る資料から、卒業生の進路を確認しておきましょう。コラボゼミ経験者は、卒業時、どのような進路に向かったのでしょうか。

卒業生の進路

最初に、コラボゼミを経験した高崎経済大学経済学部・矢野ゼミの卒業生についてです。

〈表3〉には、二〇一二年三月の卒業生（ゼミ一九期）から二〇二一年三月の卒業生（同二八期）まで、一三九人の大学卒業時の進路が具体的に挙げられています。私のみるかぎり、進路先はコラボゼミ開始前とあまり差はなく、コラボゼミの経験云々より、ゼミの特徴が反映されているのかもしれません。

私のゼミで卒業論文を『経済学研究年報』（一期生から続くゼミの卒業論文集です）に収め、巣立っていった人は、一九九四年三月の一期生から二〇二一年三月の二八期生まで、総勢三七六人になります。本学の卒業生一般に共通する特徴もありますが、それらを含め、あえて矢野ゼミ卒業生の進路の特徴を見いだせば、日本銀行、地方銀行、公務員と大学院進学者の多いことが挙げられます。それはコラボゼミ経験者にもあてはまります。

卒業生一三九人のうち、日本銀行・五人、地方銀行・二三人、公務員・一三人、大学院・一二人となります。特に大学院進学率については、文科省「学校基本調査」によると、二〇二一年三月卒業に関し、社会科学系学科では二・五%、商学・経済学関係に限定すると一・六%（高経大は一・五%、経済学部に限ると一・三%）なので、私のゼミの八・六%は特徴的と言えるでしょう（ここでカウントされていない二〇二二年三月卒業予定者にも三名の大学院進学者がいます。ゼミ卒業生全体でみても、進学率は一〇%を超えています。ちなみに、本学大学院への進学者はいません）。

コラボゼミ修了生のうち、日銀・地銀・公務員については、ドメスティックないしローカルな勤務の人が多いですが、大学院進学者はコンサルティング会社、外資系企業などでグローバルに活躍している割合が高くなります。進学者の一人は、現在、福島大学経済・経営学類准教授として地域政策、環境経済学などを担当し、自らの研究とともに、次世代の育成に日々尽力しています。地銀や役所勤務でも、歴代の卒業生の中には海外駐在、海外留学を経験している人もいますから、コラボゼミ修了生のなかから、今後も経験と実績を積み重ね、海外雄飛する人が出てくるかもしれません。

高経附卒業生の進路については、〈表4〉の通りです。

三九九人中、経済・経営・商学系が八五人（二一・三%）、法学・政治学系が九三人（二三・三%）、人文・社会・教育系

〈表３〉矢野ゼミ「高大コラボゼミ」卒業生の進路（高経大卒業時）

◇ 19 期（2012 年 3 月卒業）
ゆうちょ銀行　七十七銀行　第一生命　明治安田生命　全国信用協同組合連合会
東海東京証券　八十二証券　森精機製作所　山九　東日本旅客鉄道　岩塚製菓　巴商会
NRI データ i テック
札幌市役所　東吾妻町役場
一橋大学大学院商学研究科　早稲田大学大学院政治学研究科
◇ 20 期（2013 年 3 月卒業）
日本銀行　預金保険機構　山形銀行　きらやか銀行　足利銀行　伊予銀行　沖電気工業
ヤマハ発動機　味の素冷凍食品　北海道明販　佐藤金属　光通信
一橋大学大学院経済学研究科
◇ 21 期（2014 年 3 月卒業）
千葉銀行　群馬銀行　静岡銀行　東北労働金庫　茨城県信用組合　日本年金機構
松屋銀座　東日本旅客鉄道　長野電鉄　オイレス工業　シナノケンシ　イワタ薬品
ヤマトシステム開発　日水コン
東京大学大学院総合文化研究科　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
◇ 22 期（2015 年 3 月卒業）
日本銀行　岩手銀行　群馬銀行　東和銀行　帯広信用金庫　新潟労働金庫
日本年金機構　あいおいニッセイ同和損保　アステラス製薬　大正富山製薬　THK
日本発条　EXCEED
前橋市役所
東京大学大学院総合文化研究科
◇ 23 期（2016 年 3 月卒業）
北海道銀行　水戸信用金庫　中央労働金庫　中小企業基盤整備機構
宮城県信用保証協会　全国共済農業協同組合連合会秋田県本部　マイナビ　あさひ会計
山田ビジネスコンサルティング　ココカラファイン　大陽日酸システムソリューション
国税専門官　栃木県庁　前橋市役所
◇ 24 期（2017 年 3 月卒業）
日本銀行　北日本銀行　筑波銀行　大垣共立銀行　SMBC日興証券　東日本旅客鉄道
塩野義製薬　外山産業
東京大学大学院総合文化研究科　一橋大学大学院商学研究科
慶応大学大学院健康マネジメント研究科
◇ 25 期（2018 年 3 月卒業）
北海道銀行　群馬銀行　常陽銀行　山梨中央銀行　中央労働金庫
三菱 UFJ モルガンスタンレー証券　栗田工業　ショーワ　タカラスタンダード　一条工務店
スミセイ情報システム　インテリジェントウェイブ
◇ 26 期（2019 年 3 月卒業）
りそなホールディングス　八十二銀行　中央労働金庫　岡三にいがた証券　日本生命
東芝プラントシステム　KYB　ユーグレナ　三菱総研 DCS　ドコモ CS　トヨタカローラ高崎
埼玉労働局　長野市消防局　八千代市役所
◇ 27 期（2020 年 3 月卒業）
日本銀行　岩手銀行　静岡銀行　日本年金機構　中央労働金庫　KYB　AMADA　GU
前田建設　きんでん　IHI インフラシステム　ライフコーポレーション　ケーアイスター不動産
大塚商会　龍泉寺
一橋大学大学院経営管理研究科
◇ 28 期（2021 年 3 月卒業）
日本銀行　静銀 TM 証券　メディアリンク　サンデン
群馬県庁　長野県庁　石川県庁　藤岡市役所
東北大学公共政策大学院　東京都立大学大学院システムデザイン研究科
高校教員志望者

が一三五人（三三・八％）、国際・外国語系が四四人（一一・〇％）となっています。他の県内公立高校のデータがないので、はっきりしたことは言えませんが、文系の進路としては、こんなものかなと考えています。

高経附は男女共学ですが、近年、コラボゼミの参加者は女子が多く（直近三年間では一〇五人中、六九人で六五・七％を占めます）、それが進路に影響しているかもしれません。大学も同じですが、一般的には女子のほうが意欲的で、能力も高いという印象を持っています（ジェンダーフリーとも言われる時代、このような見解自体、陳腐かもしれませんが）。

卒業生アンケートの実施

では、アンケート結果に目を向けてみましょう。

アンケートは、二〇二一年の九月から一〇月にかけて行われました。大学卒業生については一三九人中一〇六人（回答率七六・三％）、高校卒業生については三九九人中一〇三人（同二五・八％）から回答を得ました。大学卒業生に関しては、ほぼ全員にアンケート依頼を通知できましたが、高校卒業生については、予算と時間、そして個人情報保護の問題があり、依頼できた人数は限られています。この点、お含み置きください。

大学生・高校生に対するアンケートの各質問項目については、巻末に掲げているとおりです。紙幅の関係で、本ブックレットでは、アンケート結果を概観するにとどめます。アンケートの全容は、「自由記述欄」に寄せられたコメント全文を含め、高崎経済大学地域科学研究所発行の『産業研究』第五七巻第二号（二〇二二年三月）に「資

〈表４〉高経附３年１組「高大コラボゼミ」卒業生進路

	2011.3 卒	2012.3 卒	2013.3 卒	2014.3 卒	2015.3 卒	2016.3 卒	2017.3 卒	2018.3 卒	2019.3 卒	2020.3 卒	2021.3 卒	合計
経済・経営・商学系	15	10	8	9	5	7	2	6	10	5	8	85
法学・政策系	10	11	11	8	8	13	9	6	3	7	7	93
人文・社会・教育系	7	11	17	11	20	7	15	15	13	9	10	135
国際・外国語系	0	4	3	4	6	4	4	2	7	4	6	44
スポーツ・体育系	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福祉・介護・看護系	2	1	0	1	0	1	0	0	0	1	1	7
理系	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
専門学校	0	0	1	1	2	2	1	0	0	0	1	8
就職	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
その他	2	0	1	5	2	2	3	0	4	2	4	25
合計(女子)	36 (10)	37 (10)	41 (24)	39 (17)	43 (28)	37 (19)	35 (27)	29 (23)	37 (22)	28 (20)	37 (23)	399 (230)

料」として収められていますので、そちらを参照してください（本学ＨＰから閲覧可能です）。

コラボゼミ全体への評価

一二年前、期待半分・不安半分で始めたコラボゼミを卒業生たちはどう受け止めたのでしょうか。今の彼ら・彼女らは、コラボゼミというチャレンジをどう総括しているのでしょう。

結果を見るかぎり、卒業生のコラボゼミへの評価は概ね高いと考えられます。大学卒業生のうち一〇四人（九八・一％）、高校卒業生の一〇二人（九九％）がコラボゼミに参加して「よかった」「どちらかといえばよかった」と回答しています。これには、素直に胸をなで下ろしました。

「よかった」だけをみると、それぞれ九〇・六％、七九・六％ですから、大学生のほうがコラボゼミへの評価がより高いと言えるかもしれません。正課以外の取り組みであり、時間的にはきつかったかもしれませんが、多くの学生が「コラボ」することに意味を見いだしてくれたとすれば、指導教員として大変嬉しく思います。

企業研究・訪問インタビューについて

コラボゼミの中核である「企業研究」「企業訪問・インタビュー」については、大学・高校ともほぼ全員が「よかった」「どちらかといえばよかった」と答えています。大学生はもちろんですが、高校生も、「企業研究」を通じ、知らなかった企業・業界について知識や情報が得られたこと、「企業訪問・インタビュー」で、実際に企業を訪問し担当者にインタビューしたことに興味を持ち、手応えを感じてくれたのは確かなようです。

「高校生の成長をまのあたりにしたこと」を「よかった点」として挙げている大学生は、「企業研究」については五四・七％、「企業訪問・インタビュー」で四六・二％となっています。「成果発表会で、高校生の成長を実感できたか」という質問項目があれば、おそらく多くの学生が「イエス」と答えていたでしょう。

また「大学生とともに学べたこと」を「よかった点」として挙げている高校生は、「企業研究」については五七・三％、「企業訪問・インタビュー」で五一・五％となっています。

大学生・高校生には、知識・情報の獲得以外に、企業研究を「コラボ」で行うことの意味も伝わったと考えています。

社会人基礎力

コラボゼミに参加した人たちは、それによってどのような能力が養われたのでしょうか。参考のために、二〇〇六年、経済産業省が提唱し始めた「社会人基礎力」に触れておきます。経産省は、これを「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」とし、人材育成の目安としました。

社会人基礎力とは、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」という三つの力からなるとされています（経済産業省二〇一〇）。

「前に踏み出す力」とは、主体性（物事に進んで取り組む力）、働きかけ力（他人に働きかけ巻き込む力）、実行力（目的を設定し確実に行動する力）を要素としています。

「考え抜く力」は、課題発見力（現状を分析し目的や課題を明らかにする）、計画力（課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力）、創造力（新しい価値を生み出す力）を指します。

そして「チームで働く力」とは、発信力（自分の意見をわかりやすく伝える力）、傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く力）、柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する力）、情況把握力（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力）、規律性（社会のルールや人との約束を守る力）、ストレスコントロール力（ストレスの発生源に対応する力）から構成されます。

社会人基礎力は、こうした「三つの力、一二の要素」から成り立つとされています。なるほどと思わせる内容だし、コラボゼミにも関係しそうです。こんな基礎力があればいいんだろうとも思います。ただ、総花的ですし、具体的な指標や育成手法が提示されているわけではありません。経産省主導ですから、企業社会への「適応」ばかりが強調されているようにも思われます（「官製キャリア教育」への批判的観点については、矢野 二〇一三bを参照してください）。

コラボゼミは、社会人基礎力なるものの錬成を直接目指したわけではないものの、大学生・高校生がどのような力を身につけたのかという論点は外せません。アンケートでも、これに関わる項目を設定し、それぞれの「実感」レベルではありますが、卒業生に聞いてみました。

学生たちはコラボゼミでどんな能力を伸ばせたと実感したか

問い方は、やや抽象的になってしまいましたが、アンケートでは、「論理的思考能力」「情報収集・分析能力」「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション能力」「リーダーシップ能力」の五項目について、コラボゼミを通じ、その向上をどれほど「実感」できたかを聞きました。

「論理的思考能力」について「得られた」「どちらかといえば得られた」と答えた大学生は八四・〇%、高校生は八六・四%でした。同じく「情報収集・分析能力」については、大学生九六・二%、高校生九二・二%、「コミュニケーション能力」は、それぞれ八六・八%と八六・四%、「プレゼンテーション能力」は、八〇・二%と九四・二%、「リーダーシップ能力」は、七二・六%と六八・〇%となりました。

コラボゼミで伸ばすべき能力として想定したものを獲得できたと多くの人が感じているようです。自ら情報を集める、分析することに関しては、ほとんどの卒業生がその能力向上を認めていますが、プレゼンテーションとなると、中間報告にせよ、成果発表会にせよ、舞台に立つ機会は高校生のほうが多いので、それが一四ポイントの差につながったのだと思われます。

逆に、リーダーシップ能力については、大学生のほうが五ポイントほど高くなっています。コラボゼミを主導することによって、ぜひそういった能力を向上させてほしいと願っていた立場からすると、そこそこの数字とはいえ、少々物足りなさも感じています。

その後、英語学習をどれだけ続けているか

さらに「英語能力」についても触れておきます。あくまでも「間接的」目標であり、コラボゼミは能力向上に向けた学びの「きっかけ」という認識だったので、アンケートでは、「英語学習の習慣化」という観点から問いました。

英語学習を「現在も続けＴＯＥＩＣなどを定期的に受検している」比率は大学で一一・三%、高校で一三・六%、「現在も様々な形で続けているが、ＴＯＥＩＣなどを定期的に受検していない」と合わせると、それぞれ三五・八%、三三・〇%となります。高校卒業生は、現在も大学に在学中で、ＴＯＥＩＣ受検などを義務づけられている人が多いのかもしれませんが、いずれにせよ、「英語学習の習慣化」に関するこの数字は、私の予想（期待?）よりも低いものです。

公務員を中心に、英語に向き合わざるを得ない職場がまだそれほど多くはないのかもしれません。本人がよほど心がけないかぎり、在学中、ＴＯＥＩＣ受検が必須でも、どれだけゼミで原書講読に取り組んだとしても、英語学習は続かないのだと思います。

大学については、海外赴任（留学）中もしくは海外赴任（留学）を経験済みという卒業生が一〇人いるほか、メーカーを中心に海外部門で働いている人、また大学院進学者も一定数いるので、そういった人たちは、英語学習を続けているようです。

進路への影響

大学生の進路については、上で述べたように、業種等でみれば、コラボゼミ以前と大差ありません。ただ、アンケート結果では、進路決定についてコラボゼミの影響が「なかった」「どちらかといえばなかった」が二三・六%だったのに対し、「あった」「どちらかといえばあった」との回答が五〇・〇%もありました。私が予想していたよりも高い数字です。

特定の企業を研究したから、その企業に就職する（できる）ということではないにしても、コラボゼミを通じて、今まで知らなかった業界に興味を持ったり、視野が広がったりしたのかもしれません（ちなみに、卒業論文のテーマ設定に関しては、半数の大学卒業生が「なかった」「どちらかといえばなかった」と答えています）。

高校生の「高校卒業時の進路選択」にコラボゼミが与えた影響については、「あった」「どちらかといえばあった」が六六・〇%、「なかった」「どちらかといえばなかった」が二〇・四%となっています。私自身は、この数字からコラボゼミの影響を高いとみますが、高校での進路指導の詳細には疎いので決定的なことは言えません。

高校卒業生のその後の「職業選択」については、「あった」「どちらかといえばあった」が二八・二%、「なかった」「どちらかといえばなかった」が三六・九%となっています。卒業後、大学等で学び、様々な経験を積むことによって、高校段階で（「世界は誰かの仕事でできている」に触発され?）思い浮かべた職業・進路は変わることが十分考えられますので、この数字に特に違和感はありません。

逆に言えば、それでも三割近くもの卒業生が職業選択にコラボゼミが影響したと答えているわけですから、うかつな気持ちでコラボゼミを運営するわけにはいかないなと、あらためて気を引き締めています。

あなたにとって「コラボゼミ」とは何であったか――高校生の場合

アンケート結果の概要は以上のとおりです。コラボゼミに対し、大学卒業生・高校卒業生とも、その意義を認めてくれていることが伝わってきます。

コラボゼミへの評価を率直に語ってもらうため、アンケートには「自由記述欄」も設けておきました。ここでは、まず高校生から、「生の声」のごく一部を紹介しておきましょう（読みやすさ重視で読点や仮名遣いについて若干手を加えたほかは、原文のままです）。

〇普通に生活していたのでは注目すらしなかったであろうことをたくさん学ぶことができて、本当に良かったと思う。

○多くのことを詳しく学べたのも良かったですが、大学生や大人の中に混ざり、意見を述べる機会を得ることができたのがとても貴重な経験だったと思います。
○パワポの作り方を高校で教わったからこそ、他の人と比べてパワポのクオリティに差をつけることができた。教授からもうまいと言われて、とても気分が良かった。
○ほとんど遠慮なく、なんでも言い合える仲間ができて幸せでした。
○高校生として現役の大学生と一緒にグループワークをすることは、説明会で聞くようなふんわりとしたイメージとは異なって、かなり確度の高い自分の目指す大学生像を描くことができました。
○私のチームの大学生は言い方が悪いですが、あまりものだなと高校生の自分が認識できるほど、当該大学生と他の学生との距離感がありました。他チームが大学生と連携してうまくやっている話を聞いて、高校生チームのリーダーとして他チームと比べてやるせなさとか、焦りを感じたり、うまくいっているチームに嫉妬している自分に気づいて、傷ついた記憶があります。
○大変申し上げにくいですが、学んだ知識についてはほとんど忘れてしまいました。ですが、クラスメイトと共に学んだ日々、得た経験は私の財産であり、自信につながっております。現在は就職し、学生という立場を離れましたが、あの充実した日々は、ふとした時に思いだし、高校生の皆さんにも体験して欲しいと心より思っております。
○充実した唯一無二の経験ができました。今も当時の大学生とは交流が続いています。
○高校卒業後も定期的に意見交換（現在の仕事などに関して）をできる機会があれば、また新しい発見や意見の共有ができ刺激を受けられると思う。

コラボした大学生に目標とすべき学生像を見いだした人もいれば、「親ガチャ」ならぬ「大学生ガチャ」に恵まれず、「ハズレ」だったと率直に語ってくれた人もいます。そうした点については、大学生を指導しきれなかった私にも責任の一端があります。

卒業後も意見交換できる機会があればというコメントは、一考に値します。あとでまとめるように、オンラインも使いようですから。

「卒業後」という点では、コラボゼミの同じチームで頑張った大学生と高校生が個人的に連絡をとり続け、社会人になってもランチや飲み会で意見交換をしたり、励まし合ったりしているという話をたまに聞きます。偶然、コラボゼミで出会っ

たことが互いの成長につながるような関係にまで発展するのであれば、教員にとっては望外の喜びです。

あなたにとって「コラボゼミ」とは何であったか――大学生の場合

大学生のコメントも一部抜粋しておきましょう（高校生の場合と同じく、読点や仮名遣いについてのみ、読みやすさ重視で原文に若干手を加えてあります）。

○「教える」「示す」ことで責任ある学びを体験できました。また、それぞれ本番と言えるタイミングがあることで、考え抜く力が養われたように思います。
○大学生としてリードしなければならないという意識が芽生え、積極的にゼミに参加することができました。また、成果発表会では、高校生たちの成長した姿が見られて感動しました。
○人生の大きな岐路を迎える受験生の貴重な時間をいただいて、ともに学べる機会は、大学生にとっても大きな意義があった。高校生側が想定を超える質問や考え方を見せてくれるので、我々も絶対に負けないような準備を心がけた。
○高校生の成長だけでなく、自分自身や相方の成長だったりを目の当たりにし、全体的に大きな成果を得られた良い企画だったと思う。私自身は卒論テーマや就職活動に影響したかというより、コミュニケーション能力や協調性等、人として必要なものを学べた良い機会であった。
○高崎経済大学の財産とするべし。
○企業研究で分析した会社は、今でも株価や諸情報を確認し注目しています。
○会社での資料づくり、相手に伝わる内容説明など、業務ごとの「緊急性と重要性」を判断して優先順位をつける習慣が身に付いたと思います。
○高大コラボゼミで出会った高校生とは一〇年以上の付き合いになりますが、今でも時々連絡をとっています。お互い社会人となり、他の分野で活躍されている状況に刺激をいただいております。

学生には「一人では立てない地平にたどり着け」だの、「研究した企業はこれからも『定点観測』して、経済を見渡す『窓』にしろ」だのと言ってきましたので、我が意を得たりのコメントにはニヤついています。論理的思考力だ、コミュニケーション能力だ、ということではなく、人間力が鍛えられる場だったと振り返る卒業生が何人かいました。

ともに立つスタートライン

最後に、ひとつのエピソードを紹介しておきます。

二〇一三年、高校生としてコラボゼミを経験し早稲田大学政治経済学部に進学した人と、二〇一八年、ゼミ二七期生としてコラボゼミを経験し一橋大学大学院経営管理研究科に進学した人が二〇二二年四月、まったく偶然ですが、同じ外資系コンサルティング会社に入社します。

この二人は、二〇一八年、これもたまたま、ゼミ指導教員に勧められて参加したＩＭＦ（国際通貨基金）のセミナーで顔を合わせたことがあります。その後、それぞれが大学院で学んだり、休学しながら見聞を広めたりしているうちに、巡りめぐって同じ会社に就職することになったのです。遠い将来、グローバルな舞台での活躍を夢見て、別の時期にコラボゼミに参加した高校生と大学生が著名なコンサルティング会社で同時に第一歩を踏み出すことになりました。

これをコラボゼミの「成果」などと言うつもりはありません。でも、この一報に触れた時、長年、コラボゼミに関わってきた私は、しばし感慨に耽りました。コラボゼミに参加する大学生・高校生には、これからも「一期一会」「出会い」の大切さを説いていこうと思います。

いつかまた、リアルな企業訪問を

おわりに――コロナ危機を越え、さらなる発展に向けて

「濃厚接触系・体温伝達型」ゼミの危機――新型コロナの大打撃

高経大・矢野ゼミと高経附三年一組の間で一二年にわたり行われてきた「高大コラボゼミ」について、長々と述べてきました。小綺麗な数量データで「効能」を説明するには至りませんでしたが、コラボゼミの概要や卒業生の受け止め方など、ご理解いただけたでしょうか。

コラボゼミは、二〇一〇年から二〇一九年の一〇年と、二〇二〇年・二〇二一年の二年とでは、その様相が大きく異なります。新型コロナウィルスに翻弄され、内容の変更を迫られたからです。

新型コロナ禍の影響を受けたのは、もちろんコラボゼミだけではありません。でも、「ゼミ」という形式への打撃は、一方通行の講義・授業以上に大きかったと思います。特に、コラボゼミにも投影されている「矢野ゼミ方式」は、新型コロナを前にして、一時は茫然自失状態でした。

パンデミック以降、感染拡大下の流行り言葉を文字って、私は自分のゼミを「濃厚接触系・体温伝達型」と称するようになりました。ゼミの時間延長なんて当たり前。春・夏の合宿、卒業生の追いコン合宿、嬉しいにつけ，悲しいにつけの飲み会、他大学との合同ゼミ、そしてコラボゼミ。同期生にとどまらず、先輩や後輩を含め、ゼミの仲間と文字通り「ひとつ屋根の下で過ごす」時間が長く、「同じ釜の飯を食う」機会が多いというのが私のゼミでした。この積み重ねによって、二年に一度、ゼミの現役生・卒業生が（時に家族同伴で）一堂に会する「ゼミ総会」が開催されるような、高経大でも有数のネットワークが築かれてきたのです（矢野二〇一〇）。

京都での合同ゼミ

青空ゼミ

仲間と時空を共有しながら、輪読し、議論し、行動するゼミが新型コロナによって「濃厚接触」も「体温伝達」の機会も奪われ、「オンライン」という、いわば「非接触系・断熱型」ゼミへの宗旨替えを迫られた。「飛車・角落ちの将棋」を強いられる。大げさに聞こえるかもしれませんが、これがパンデミックに見舞われた際、高経大で三〇年以上、ゼミを率いてきた教員の抱いた実感なのです。

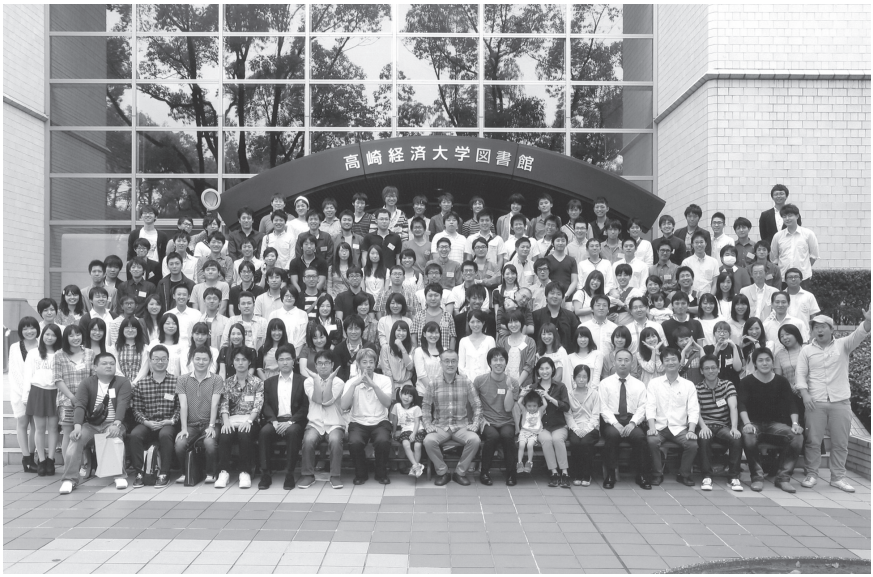
ゼミでも「情報をやりとりする」だけならデジタルで十分だし、かえって便利でしょう。「非接触系・断熱型」のほうが、時間的にもコスト的にも（体力的にも？）負担が少なくて済むのかもしれません。でも、本当にそれでいいのかと悶々としていました。

コラボゼミをどうする？

本パンフレットでいろいろな内容・方式に言及しましたが、結局のところ、コラボゼミも「出会い」と「時空の共有」が肝であり、高校生にとっては「濃厚接触系・体温伝達型」ゼミの疑似体験により学びへの意識を高め、将来を展望できるようにすることが目標でした。

大学・高校を問わず、教育現場はどこも保守的なところが多く、企業の受け入れも難しいだろうということで、二〇二〇年の春、「緊急事態宣言じゃ、コラボゼミの中止もやむなし」という空気が一瞬流れました。

でも、三年一組での企業研究を楽しみに、一年生から文系オナー活動を続けてきた多くの高校生に「ゼロ回答」というわけ



２年に１度のゼミ総会

にはいきません。「いつもと同じ」ではなくても、「世界は誰かの仕事でできている」現実に迫り、コラボゼミの醍醐味を少しでも体験させてあげたい。これがコラボゼミに関わる大学・高校教員共通の願いでした。

できることをできる範囲でやる。「ゼロか、一〇〇か」「白か、黒か」ではなく、六〇、七〇そこそこの塩梅で現実的打開策、妥協点を見いだすのも「大人への第一歩」だよ、などと言ってきたわけですから、ここで範を垂れないわけにはいきません。二〇二〇年も、二〇二一年も、対面でのやりとりは大きく制約され、Ｚｏｏｍでの開催が多くなりました。それでも関係教職員の尽力によって、何度かは対面のゼミも実施でき、企業訪問・インタビューも何とかオンラインで実現しました。そりゃ、企業訪問もリアルがいいに決まっています。金と時間はかかるし、一日仕事ですから体力も消耗します。しかしながら、だからこその実体験ができます。

～朝早く集合し、皆で東京本社に至る道中の景色。学校とは違うオフィス街独特の空気。会社に足を踏み入れ、エレベーターで案内される時、その閉鎖空間が増幅する緊張感。隣りをチラ見した時、目に映るこわばった顔。ぎこちない挨拶のあと、滑舌悪く始まったインタビュー。「まずは君たちのプレゼンテーションから始めてください」と言われ、ちびりそうになった高校生。バリバリできる感じのビジネスパーソンから「よく勉強していますね」と面と向かって誉められた時のちょっとした自信。出されたペットボトルに口もつけないまま、インタビュー後、オフィスを出たあとの充実感と開放感～

これらすべて、リアルな訪問あってこそです。私は、企業訪問後、恒例となっていた午後の施設見学の場所に三々五々、大学生・高校生が笑顔で集まってくる様子を眺めるのが毎回楽しみでした。大学卒業生アンケートの自由記述欄に「私は対面で高校生と関わり、本社訪問をすることができたのでとてもいい経験になりました。この高大コラボゼミは対面で得られるものが大きいと思うので、できる範囲で対面で実施できたらいいなと思います」と書いてくれた人がいました。まさに、御意！

オンラインの効用

ただ今回のパンデミックは、社会のあり方に不可逆的な変化をもたらしそうです。コラボゼミも、すべてリアル、すべて対面ではなく、それを志向しつつも、オンラインの利便性も活用するというのが「新常態」になるのかもしれません。

実際にやってみて思ったのですが、オンライン企業訪問には利点もあります。リアルな経験がもたらす無形の効果とト

レードオフにはなるのですが、年々厳しくなる予算と時間（学事日程その他）の制約や受験生の体力温存という観点だけからもそうですし、訪問企業の地理的制約も乗り越えられます。各グループが同日・同時間帯に、距離の離れた別々の企業を「訪問」できます（二〇二〇年には、東京やその近郊の会社だけではなく、長野県や石川県の地方製造企業がケーススタディの対象になりました）。

オンラインだと画面共有による情報伝達も明確・迅速になるし、（企業側の許諾が必要ですが）提示データの保存、インタビューの録画も容易で、当日は下を向いてメモをとるよりも、インタビュー、ディスカッションに集中できます。これによって、成果発表会の準備に費やす労力も省かれ、高校生の負担が若干軽減されます。

二〇二〇年、二〇二一年、一部オンライン化を迫られた大学生と高校生の話し合いの場でも、日常的な連絡、事前の準備が十分であれば、コラボゼミを回せるという感触を得ました。

コラボゼミのデジタルトランスフォーメーション？

不肖、矢野修一、恥ずかしながら、パンデミック前はＺｏｏｍの名前も知らず、オンライン会議の経験すらありませんでした。教室に集まってワイワイ、ガヤガヤ議論をし、紙で提出された卒論やレポートに、赤ペン先生よろしく、コメントと添削を繰り返すのが正しい道（！）と信じていました。

ところが、大学の講義でもオンラインを強いられ、ヒーヒー言いながらでも、いろいろな人に助けられて、初歩的なことはできるようになりました。対面に制限のかかったコラボゼミでも「ブレークアウトルーム」を使い、何とかグループワークを実施できたのです。

また、各班の研究の進捗状況やメンバーの参加姿勢を紙ベースで確認していた頃は考えもしませんでしたが、今では、ＬＩＮＥワークスを使って、大学生と高校生がやりとりするとともに、それを大学・高校の教員が閲覧し、コメントもできる環境が整いました。こうしたことに関しては、確実にオンラインのほうが有効です。

要するに、新型コロナのパンデミックによって、コラボゼミは大きな制約を受け、変化を余儀なくされましたが、遅まきながらＤＸ化が進みつつあるのです（世間では、上述のようなレベルのことをＤＸと捉えるのかどうか、定かでないため、見出しには「？」を付けましたが）。

デジタル化にうまく対応すれば、コラボゼミを進化させることができるかもしれません。私が「濃厚接触系・体温伝達型」ゼミの熱烈な信奉者であることに変わりはありませんが、今では、オンラインの併用はリアルな世界の経験を充実させる

可能性があるとの認識に至っています。

これが新常態なら、拒否しても始まりません。オンラインを活用すれば、コラボゼミ修了生の集結、定期的懇談も（みんな、もう大人だからオンライン飲み会も！）可能となるでしょう。時空を超えた「ゼミ」の可能性が広がるかもしれないのです（パンデミック後、私が数回実施した卒業生とのオンラインゼミでは、ニューヨーク、ロンドン、ロッテルダムからの参加者もいました）。

グローバル社会への感性

先日、何気なく新聞を見ていると、コロナ後の社会、人間関係を展望した美学者・伊藤亜紗氏（東京工業大学教授）のコメントが目にとまりました。「ゼミ」とはまったく違う文脈で語られていたのですが、その内容は、すっと腑に落ちました。

「双方向の関係で大切にされた個々の事情や共生の場はなくなり、そこで偶然生まれたノウハウや風土までも失われかねない」と、オンラインによる「接触」機会の喪失を嘆き、リアルな「接触」の重要性を認識しつつ、次のように述べていたのです（『日本経済新聞』二〇二一年一月三一日付）。

「だが、悲観論に支配されてもいけない。…中略…『空気や場所を物理的に共有せずとも、相手に出会う』といった感性に敏感になることも大切ではないか。」

大学生・高校生だけではなく、私にとっても会得の難しそうな「感性」です。でも、これこそがコラボゼミで育むべきものなのかもしれません。

コラボゼミだけではなく「世界経済論」や「アジア経済論」など日頃の講義でも、学生に繰り返し伝えてきました。

「グローバル化とは、地球の裏側で起こっていることでも他人事にはできない社会ができあがったということだ。」

地球の裏側にいる人とリアルな接触を図るのは容易ではありません。でも、そこに思いをはせなければ、私たちもその一員であるグローバル社会を理解し、より良くするために行動を起こすなど不可能です。

流行りのＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）を実現するにも「空気や場所を共有せずとも」「出会う」ための「感性」が必要になるはずです。オンラインがそうした「感性」への扉を開けてくれるのであれば、リアル志向のコラボゼミでも、利用できるところは利用すべきなのでしょう。

コラボゼミの展望

開始間もない頃、コラボゼミについて論じた時、発展に向けた課題をいくつか挙げました（矢野 二〇一一／二〇一三ａ）。

まずは「企業との折衝」です。コラボゼミでは日本企業のケーススタディと訪問・インタビューが柱なので、受け入れ企業の選定が非常に重要です。大学・高校教員の手に余る、この最重要課題については、一〇年にわたって経営支援ＮＰＯクラブにお世話になり、何とか乗り越えられています。新型コロナ感染拡大という状況の中でも、企業訪問を続けることができました。また、高崎市内の中小製造企業の皆さんにも協力を仰ぎ、高校生ばかりか、大学生にも工場見学の機会を与えていただきました。今後も、良好なコミュニケーションのもと、コラボゼミを続けられたらと願っています。

もうひとつ挙げていたのが、コラボゼミに関わる「制度化」です。要するに、単発のイベントではなく、継続しようとするなら、「予算と人」が必要になると訴えていたのです。

開始当初は、何の予算化もなされていませんし、事務担当も明確ではありませんでした。今では、高経大・高経附の高大連携全般について、高崎経済大学学長と高崎市教育長との間で協定書が交わされ、大学・高校の担当部署が定められました。高経附では、文科省によるＳＧＨ指定を経て、後継事業としてのＴＳＵＢＡＳＡプロジェクトも始まり、コラボゼミに関しても、必要最低限の予算が確保されています。外部支援の獲得が日常的チャレンジになり、実績も上げています。

以上のように、過去において「課題」として挙げたことは、関係各方面の努力によって、かなり改善しました。印刷会社に発注し、きちんと製本された『高大コラボゼミ成果報告書』を手にすると（こんなことを書いている時点でＤＸ化未だしなのですが）、学内の印刷機を回し、一部ずつホッチキスで閉じていた頃が懐かしく思えるほどです。

ただし「高崎からのグローカル人材育成」に向け、コラボゼミを今後さらに発展させるには、予算の拡充を含め、まだまだ改善の余地があります。そのためにも高経大・高経附教職員には、なおいっそうの協力を仰がなければなりません。冒頭で「一般市民」への紹介のためと書きましたが、本ブックレットには「身内」にもっとコラボゼミを知ってもらいたいとの思いも込められています。

コラボゼミは大学から高校への一方的施しではなく、大学生も「教えることを通じて学ぶ」双方向的高大連携モデルで

あり、特定の学校間連携にとどまらず、より普遍的な意義、そして実現可能性を有するプログラムです。

高経大では、次期中期計画においても、高経附との連携は「地域貢献」という位置づけです。もちろん、地域貢献に間違いはありませんが、それだけだと片翼飛行です。連携による本学学生に対する教育効果への「想像力」がいまだに欠けている気がしてなりません。

高大に限らず、異なる学校種間の「連携」「接続」は、今や教育分野のキーワードです。二〇二二年四月には、東京で全国初の公立小中高一貫校が誕生します。グローバルに活躍する人材の育成をにらんで、東京都立立川国際中等教育学校に附属小学校が設立され、小中高の一二年一貫教育が始まるのです。東京都立大学もありますから、東京では都立の一六年一貫（大学院まで考えればさらに長期の）教育が可能になるわけです。

条件があまりにも違いますが、高崎市ではどうでしょう。小中一貫教育、中高一貫教育、さらには、東京のように、小中高一貫教育を展望できるでしょうか。そして近い将来、もしもこれら一貫教育が高崎市でも志向され、実現した暁に、高経大との「連携」はどのように位置づけられるでしょうか。

その時点でも、様々な主体と連携しながら「一六年かけてグローカル人材を育成する」というのは、無謀な構想という扱いなのかもしれません。一二年間積み上げられ、この先も続くであろう高経大と高経附のコラボゼミが、まだ見ぬ大作のデッサン、その一枚になる日が来るのかどうか。話をここまで広げれば、もはや妄想です。そろそろ本冊子を閉じることとしましょう。

【謝辞】

コラボゼミの企業研究・訪問にあたっては、長年にわたり、認定特定非営利活動法人「経営支援ＮＰＯクラブ」の皆様、とりわけ歴代理事長ならびに嶋津洋二氏、東郷修氏には、多大なご協力をいただきました。

本冊子をまとめるにあたっては、高経附教諭・高大連携課長の武井純子先生に、高経附の資料収集等で大変お世話になりました。武井先生には、毎年、経営支援ＮＰＯクラブや各企業担当者との細かな連絡・調整を一手に引き受けていただきました。

また、高経附教諭・黒田圭一先生には、コラボゼミをはじめ、高大連携の「制度化」を走りながら考えざるを得なかった頃から「伴走」していただきました。高経附卒業生へのアンケート実施でも大変お世話になりました。

高経大経済学部経済学科四年の小野瑠唯さん（高経附三年一組出身／高経大・矢野ゼミ第二九期生）には、今回のアンケー

ト結果の整理・とりまとめに協力してもらいました。

最後になりましたが、高経大の前・経済学部長、現・地域科学研究所長である高松正毅教授には、コラボゼミ開始当初より、ご理解・ご協力を賜り、企業訪問に何度も同行いただきました。さらには、高経附との「高大接続改革」でもご尽力いただきました。

高経大・高経附の「高大コラボゼミ」は、本冊子でお名前を挙げた以外にも、数多くの方々のご協力に支えられてきました。あらためて、ここに感謝申し上げます。今後とも、何卒よろしくお願いいたします。

主要参考文献

金子元久（二〇〇七）『大学の教育力―何を教え、学ぶか』ちくま新書。

上岡国夫（二〇〇三）「高等学校改革の試み―高崎経済大学附属高等学校の場合」『高崎経済大学論集』第四五巻第四号、高崎経済大学経済学会。

経済産業省編（二〇一〇）『社会人基礎力育成の手引き―日本の将来を託す若者を育てるために』朝日新聞出版。

高崎経済大学産業研究所編（二〇一三）『高大連携と能力形成』日本経済評論社。

田口哲男（二〇一八）『高校生に確かな学力をつける―アクティブ・ラーニング型授業や探究的学習の実践を通して』学事出版。

田口哲男（二〇一九）『高校生における学びと技法―探究で資質・能力を育てる』一藝社。

田口哲男（二〇二一）『探究―理論と演習』一藝社。

船曳建夫（二〇〇五）『大学のエスノグラフィティ』有斐閣。

溝上慎一責任編集／京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾編（二〇一五）『どんな高校生が大学、社会で成長するのか―「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ』学事出版。

矢野修一（二〇一〇）「地方公立大学にとっての卒業生の重要性―ゼミを媒介としたネットワークの形成」高崎経済大学附属産業研究所編『地方公立大学の未来』日本経済評論社。

矢野修一（二〇一一）「高大コラボゼミの意義と課題」『産業研究』第四六巻第二号、高崎経済大学附属産業研究所。

矢野修一（二〇一三ａ）「高大コラボゼミの相乗効果―双方向的高大連携の試み」高崎経済大学産業研究所編（二〇一三）所収。

矢野修一（二〇一三ｂ）「高大連携と能力形成の展望」高崎経済大学産業研究所編（二〇一三）所収。

巻末資料1

矢野ゼミ卒業生「高大コラボゼミ」アンケート質問項目*

＊……アンケート結果は高崎経済大学地域科学研究所『産業研究』第 57 巻第 2 号（2022 年 3 月刊）に収録（高崎経済大学 Web サイトより閲覧可能：TOP ＞研究活動＞地域科学研究所＞紀要『産業研究』）。

(1) ゼミ何期生ですか

1．19 期　2．20 期　3．21 期　4．22 期　5．23 期
6．24 期　7．25 期　8．26 期　9．27 期　10．28 期

(2) 現在の職業

1．自営業（経営者・個人事業主）　2．会社員・職員（正規）
3．会社員・職員（臨時・嘱託等）　4．公務員（正規）　5．公務員（臨時・嘱託等）
6．専業主婦（主夫）・家事手伝い　7．無職　8．学生

(3) 勤務先の業種

＊「(2) 現在の職業」で「1．～4.」に○を付けた方のみお答えください。

1．農林・水産・鉱業　2．建設業　3．製造業　4．電力・ガス・水道
5．情報・通信　6．商社　7．流通・小売　8．金融・証券・保険業
9．不動産業　10．コンサルティング　11．研究・高等教育機関
12．教育機関・学校法人　13．医療・福祉　14．広告・出版・印刷業
15．行政サービス　16．団体・組合等　17．サービス（10 ～ 16 以外）
18．その他

(4) 高校生とともに取り組んだ「円ダービー」について

1．よかった　2．どちらかといえばよかった　3．どちらともいえない
4．どちらかといえばよくなかった　5．よくなかった

(5) 高校生とともに取り組んだ「円ダービー」についてよかった点（複数回答可）

1．為替について情報・知識が得られたこと
2．世界情勢について情報・知識が得られたこと
3．新聞を読む習慣がついたこと
3．高校生の成長をまのあたりにしたこと

(6) 高校生とともに取り組んだ「企業研究」について

1．よかった　2．どちらかといえばよかった　3．どちらともいえない
4．どちらかといえばよくなかった　5．よくなかった

(7) 高校生とともに取り組んだ「企業研究」についてよかった点（複数回答可）

1. 知らなかった業界について情報・知識が得られたこと
2. 知らなかった企業について情報・知識が得られたこと
3. 企業での働き方について情報・知識が得られたこと
4. グローバル経済の動向、日本企業と世界のつながりについて情報・知識が得られたこと
5. 新聞を読む習慣がついたこと
6. 高校生の成長をまのあたりにしたこと。

(8) 高校生とともに行った「企業訪問・インタビュー」について
1. よかった　2. どちらかといえばよかった　3. どちらともいえない
4. どちらかといえばよくなかった　5. よくなかった

(9) 高校生とともに行った「企業訪問・インタビュー」についてよかった点（複数回答可）
1. 企業を直接訪問し担当者にインタビューできたこと
2. 企業を直接訪問し会社の雰囲気を肌で感じられたこと
3. 慣れ親しんだ教室を離れ仲間とともに学べたこと
4. 高校生の成長をまのあたりにしたこと

(10)「企業訪問・インタビュー」の後、高校生とともに訪れた施設・企業見学について

1. よかった　2. どちらかといえばよかった　3. どちらともいえない
4. どちらかといえばよくなかった　5. よくなかった

(11) 高大コラボゼミを通じて「論理的思考能力」を
1. 得られた　2. どちらかといえば得られた　3. どちらともいえない
4. どちらかといえば得られなかった　5. 得られなかった

(12) 高大コラボゼミを通じて「情報収集・分析能力」を
1. 得られた　2. どちらかといえば得られた　3. どちらともいえない
4. どちらかといえば得られなかった　5. 得られなかった

(13) 高大コラボゼミを通じて「コミュニケーション能力」を
1. 得られた　2. どちらかといえば得られた　3. どちらともいえない
4. どちらかといえば得られなかった　5. 得られなかった

(14) 高大コラボゼミを通じて「プレゼンテーション能力」を
1. 得られた　2. どちらかといえば得られた　3. どちらともいえない
4. どちらかといえば得られなかった　5. 得られなかった

(15) 高大コラボゼミを通じて「リーダーシップ能力」を

1．得られた　　2．どちらかといえば得られた　　3．どちらともいえない
4．どちらかといえば得られなかった　　5．得られなかった

(16) 進路・職業の選択に「高大コラボゼミ」が与えた影響について
1．あった　　2．どちらかといえばあった　　3．どちらともいえない
4．どちらかといえばなかった　　5．なかった

(17) 卒業論文のテーマ設定に「高大コラボゼミ」が与えた影響について
1．あった　　2．どちらかといえばあった　　3．どちらともいえない
4．どちらかといえばなかった　　5．なかった

(18) 大学卒業後、現在までの「英語学習」について
1．現在も続け TOEIC などを定期的に受検している
2．現在も様々な形で続けているが、TOEIC などを定期的に受検していない
3．大学卒業後、英語学習から遠ざかっている

(19) 学生時代に「高大コラボゼミ」に参加して
1．よかった　　2．どちらかといえばよかった　　3．どちらともいえない
4．どちらかといえばよくなかった　　5．よくなかった

(20)「高大コラボゼミ」についての意見や要望など（自由記述）

巻末資料2

高経附3年1組卒業生「高大コラボゼミ」アンケート質問項目*

＊……アンケート結果は高崎経済大学地域科学研究所『産業研究』第 57 巻第 2 号（2022 年 3 月刊）に収録（高崎経済大学 Web サイトより閲覧可能：TOP ＞研究活動＞地域科学研究所＞紀要『産業研究』）。

(1) 卒業年次はいつですか：平成（H）○年3月、令和（R）○年3月

1. H23.3　2. H24.3　3. H25.3　4. H26.3　5. H27.3
6. H28.3　7. H29.3　8. H30.3　9. R1.3　10. R2.3
11. R3.3

(2) 高校卒業時の進路

1. 国立大学　2. 公立大学　3. 私立大学　4. 短期大学
5. 外国の大学　6. 専門学校　7. 就職　8. その他

(3) (2) で「1. ～4.」と回答された方の入学学部

1. 経済・経営・商学系　2. 法律・政治・政策系
3. 外国語・外国文化・国際系　4. 教育・社会・文化系　5. スポーツ・体育系
6. 福祉・介護・看護系　7. 工学系　8. 理学系　9. 農学系　10. その他

(4) 現在の職業

1. 自営業（経営者・個人事業主）　2. 会社員・職員（正規雇用）
3. 会社員・職員（非正規雇用）　4. 公務員（正規雇用）
5. 公務員（非正規雇用）　6. 専業主婦（主夫）・家事手伝い
7. 無職　8. 学生・院生

(5) 勤務先の業種*

＊「(4) 現在の職業」で「1. ～ 4.」に○を付けた方のみお答えください。

1. 農林・水産・鉱業　2. 建設業　3. 製造業　4. 電力・ガス・水道
5. 情報・通信　6. 商社　7. 流通・小売　8. 金融・証券・保険業
9. 不動産業　10. コンサルティング　11. 研究・高等教育機関
12. 教育機関・学校法人　13. 医療・福祉　14. 広告・出版・印刷業
15. 行政サービス　16. 団体・組合等　17. サービス（10 ～ 16 以外）
18. その他

(6) 大学生とともに取り組んだ「円ダービー」について

1. よかった　2. どちらかといえばよかった　3. どちらともいえない
4. どちらかといえばよくなかった　5. よくなかった

(7) 大学生とともに取り組んだ「円ダービー」についてよかった点（複数回答可）
1. 為替について情報・知識が得られたこと
2. 世界情勢について情報・知識が得られたこと
3. 新聞を読む習慣がついたこと
4. 大学生とともに学べたこと

(8) 大学生とともに取り組んだ「企業研究」について
1. よかった　2. どちらかといえばよかった　3. どちらともいえない
4. どちらかといえばよくなかった　5. よくなかった

(9) 大学生とともに取り組んだ「企業研究」についてよかった点（複数回答可）
1. 知らなかった業界について情報・知識が得られたこと
2. 知らなかった企業について情報・知識が得られたこと
3. 企業での働き方について情報・知識が得られたこと
4. グローバル経済の動向、日本企業と世界のつながりについて情報・知識が得られたこと
5. 新聞を読む習慣がついたこと
6. 大学生とともに学べたこと

(10) 大学生とともに行った「企業訪問・インタビュー」について
1. よかった　2. どちらかといえばよかった　3. どちらともいえない
4. どちらかといえばよくなかった　5. よくなかった

(11) 大学生とともに行った「企業訪問・インタビュー」についてよかった点（複数回答可）
1. 企業を直接訪問し担当者にインタビューできたこと
2. 企業を直接訪問し会社の雰囲気を肌で感じられたこと
3. 慣れ親しんだ学校・教室を離れ仲間とともに学べたこと
4. 大学生とともに学べたこと

(12)「企業訪問・インタビュー」の後、大学生とともに訪れた施設・企業見学について
1. よかった　2. どちらかといえばよかった　3. どちらともいえない
4. どちらかといえばよくなかった　5. よくなかった

(13) 高大コラボゼミを通じて「論理的思考能力」を
1. 得られた　2. どちらかといえば得られた　3. どちらともいえない
4. どちらかといえば得られなかった　5. 得られなかった

(14) 高大コラボゼミを通じて「情報収集・分析能力」を
1. 得られた　2. どちらかといえば得られた　3. どちらともいえない

4．どちらかといえば得られなかった　　5．得られなかった

（15）高大コラボゼミを通じて「コミュニケーション能力」を
1．得られた　　2．どちらかといえば得られた　　3．どちらともいえない
4．どちらかといえば得られなかった　　5．得られなかった

（16）高大コラボゼミを通じて「プレゼンテーション能力」を
1．得られた　　2．どちらかといえば得られた　　3．どちらともいえない
4．どちらかといえば得られなかった　　5．得られなかった

（17）高大コラボゼミを通じて「リーダーシップ能力」を
1．得られた　　2．どちらかといえば得られた　　3．どちらともいえない
4．どちらかといえば得られなかった　　5．得られなかった

（18）高校卒業後の進路選択に「高大コラボゼミ」が与えた影響について
1．あった　　2．どちらかといえばあった　　3．どちらともいえない
4．どちらかといえばなかった　　5．なかった

（19）職業選択に「高大コラボゼミ」が与えた影響について*
＊「（4）現在の職業」で「1．～4．」に○を付けた方のみお答えください。
1．あった　　2．どちらかといえばあった　　3．どちらともいえない
4．どちらかといえばなかった　　5．なかった

（20）高校卒業後、現在までの「英語学習」について
1．現在も続けTOEICなどを定期的に受検している
2．現在も様々な形で続けているが、TOEICなどを定期的に受検していない
3．大学・短大等卒業後、英語学習から遠ざかっている

（21）「高大コラボゼミ」でともに学んだ大学生との交流について
1．現在も連絡を取り合っている
2．高校卒業後、しばらく連絡を取り合っていた
3．高校卒業後の交流はない

（22）高校時代に「高大コラボゼミ」に参加して
1．よかった　　2．どちらかといえばよかった　　3．どちらともいえない
4．どちらかといえばよくなかった　　5．よくなかった

（23）「高大コラボゼミ」についての意見や要望など（自由記述）

【執筆者紹介】
矢野　修一　　一九六〇年生まれ
高崎経済大学経済学部教授　　京都大学博士（経済学）
専門　世界経済論・開発経済論・経済思想
主要業績
単著『可能性の政治経済学―ハーシュマン研究序説』法政大学出版局、二〇〇四年。
共著『現代経済学―市場・制度・組織』岩波書店、二〇〇八年。
共編著『新・アジア経済論―中国とアジア・コンセンサスの模索』文眞堂、二〇一六年。
共著『経済学のパラレルワールド―入門　異端派総合アプローチ』新評論、二〇一九年。
共編著『アジア経済論』文眞堂、二〇二二年。
翻訳　アルバート・ハーシュマン『離脱・発言・忠誠―企業・組織・国家における衰退への反応』ミネルヴァ書房、二〇〇五年。
共訳　スーザン・ストレンジ『国際通貨没落過程の政治学―ポンドとイギリスの政策』三嶺書房、一九八九年。
共訳　アルバート・ハーシュマン『連帯経済の可能性―ラテンアメリカにおける草の根の経験』法政大学出版局、二〇〇八年。
共訳　エリック・ヘライナー『国家とグローバル金融』法政大学出版局、二〇一五年。

高崎経済大学ブックレットの刊行について

高崎経済大学の付置研究機関であります地域科学研究所では，経済学，経営学，地域政策学に係わる基礎的研究を行う一方，高崎市民，群馬県民のみなさまの生涯学習に寄与するために，公開講演会，公開講座，高崎市中央公民館との連携公開講座，地域の歴史や地域問題を学ぶ地元学講座，地域めぐり，そして中心市街地に復活し，本学学生が運営しているcafeあすなろを会場とした市民ゼミなどの事業を展開しております。

今般，高崎経済大学では，高崎市民，群馬県民のみなさまに，高崎市の歴史や現状をよりよく知っていただく一助となるよう高崎経済大学ブックレットを刊行することにいたしました。

今後，様々な角度から高崎市の過去・現在・未来を考えてまいります。一読いただき，感想をお寄せください。また，取り上げてもらいたいテーマなどがありましたら，地域科学研究所までお寄せください。お待ちしています。

第７号は、矢野修一所員（経済学部教授・世界経済論）が高崎経済大学と高崎経済大学附属高等学校の間で2010年４月から行われている「高大コラボゼミ」を振り返り、「グローカル人材育成」に向けた高大連携を紹介しています。企業を題材に、高校生と大学生が、ゼミという形式で学ぶ意義、その方法、それを支える様々な主体について、高大の卒業生アンケートも踏まえ、まとめています。12年にわたる「高・大・産・老」連携プログラムに、地方都市における大学を触媒とした人材育成のヒントを見いだしていただければ幸いです。アンケート結果の全容は当研究所紀要『産業研究』57巻２号（2022年３月刊）に収められていますので、併せてご参照ください。

発　行　2022年３月15日
著　者　矢野　修一
編　者　高崎経済大学地域科学研究所
〒370-0801
群馬県高崎市上並榎町1300
電話(027)344-6267
E-mail: chiikikagaku@tcue.ac.jp
©高崎経済大学地域科学研究所2022
印刷／㈲隆美堂印刷

本書の無断複写は著作権法上の例外を除き禁じられています。